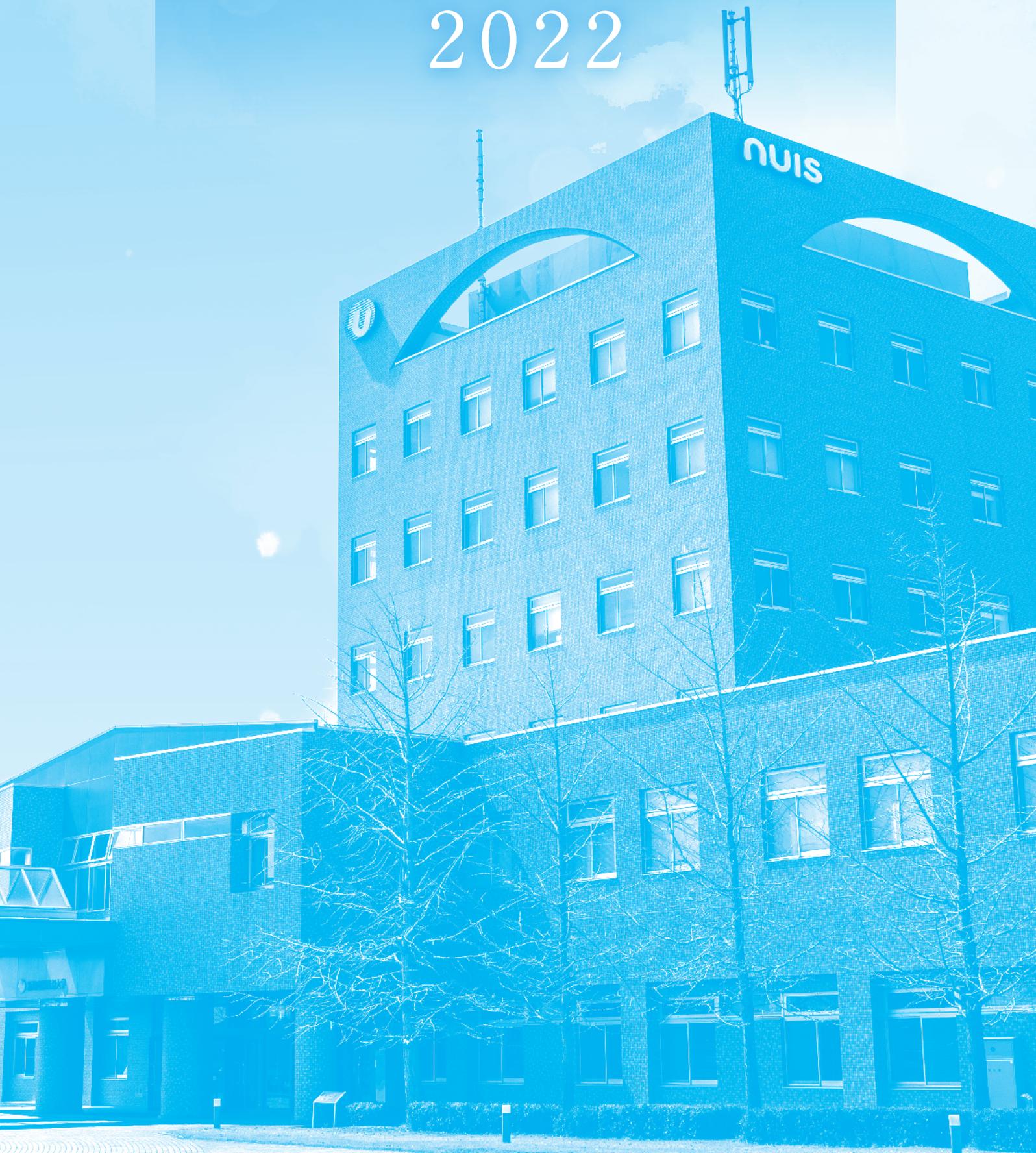


研究者総覧 2022



新潟国際情報大学
Niigata University of International and Information Studies

研究者総覧 2022



新潟国際情報大学「研究者総覧」(2022)について

大学教員の仕事は3つあります。研究、教育、行政です。まず自らの関心にもとづき研究をおこないます。次にその研究成果をもとに学生たちを教育します。そして教授会や委員会などの場で大学行政の運営に参加します。

本学は1994年(平成6年)「環日本海拠点都市新潟の地に国際化、情報化が進む現代社会に貢献する人材の育成に努めること」という理念の下に設立されました。その年に最初の学生が入学し、3年後に4年生までそろい、いわゆる完成年度を迎えました。

その完成年度以降、現在に至るまで本学では「国際学部」「経営情報学部」ともに新任の専任教員をすべて公募制で採用してきました。公募制とは、新規に採用したい教員の研究分野、担当科目、職位などを大学側が明らかにして広く世界に募り、その応募者全員を公平に審査して専任教員を選任することです。その仕組みを簡単にいえば「コネ採用」をおこなっていないということです。

設立以来、本学はおかげ様で順調に発展を続け、今や創立30年を迎えようとしています。この間に送り出した多くの卒業生たちは地元新潟を中心に活躍しており、建学の目的に沿って着実に歴史を積み重ねて来たと自負しています。そうした本学の発展は本学の教員採用の方法とも関連しているのではないかと私は考えています。公募制により優秀な研究者を継続して採用できてきたからと思われるためです。その意味で本学の教員はまず何よりも研究者です。各自の研究分野が確固としてあるからこそ、それをもとに講義内容として新しいもの、重要なものを提供することができます。また研究と教育の経験から教員たちは大学のあるべき姿を理解し、大学行政に生かしてきました。

この「研究者総覧」は本学教員の研究内容を紹介しています。知的財産としての彼／彼女らの知識、研究成果を、本学の学生はもとより、本学を目指す高校生の皆さん、企業、行政機関、他大学など各種教育機関に属する方、地域住民の皆さんなど、多くの方々に広く知っていただければ幸いです。

大学教員の3つの仕事に4つめを加えるとすれば、みずからの研究成果を社会に還元するということです。いろいろな機会にこの研究資源を皆様に活用いただくことも期待しております。本総覧がこうした所期の目的と役割を十分に果たすことを願っております。

2022年4月

新潟国際情報大学 学長 越 智 敏 夫

目次

| | |
|-----------------|----|
| 学長 | 6 |
| 国際学部 国際文化学科 | 9 |
| 白井 陽一郎 | 11 |
| 區 建英 | 12 |
| 小山田 紀子 | 13 |
| 佐々木 寛 | 14 |
| 澤口 晋一 | 15 |
| 申 銀珠 | 16 |
| アレクサンドル プラーソル | 17 |
| 矢口 裕子 | 18 |
| 吉澤 文寿 | 19 |
| 熊谷 卓 | 20 |
| 小林 伊織 | 21 |
| 鈴木 佑也 | 22 |
| 瀬戸 裕之 | 23 |
| 藤本 直生 | 24 |
| 山田 裕史 | 25 |
| 佐藤 泰子 | 26 |
| 堀川 祐里 | 27 |
| ジュリアス マルティネス | 28 |
| シンシア スミス | 29 |
| 経営情報学部 経営学科 | 31 |
| 内田 亨 | 33 |
| 木村 誠 | 34 |
| 佐々木 宏之 | 35 |
| 藤瀬 武彦 | 36 |
| 藤田 晴啓 | 37 |
| 阿部 聡 | 38 |
| 小宮山 智志 | 39 |
| 佐々木 桐子 | 40 |
| 藤田 美幸 | 41 |
| 山下 功 | 42 |
| 今井 裕紀 | 43 |
| 経営情報学部 情報システム学科 | 45 |
| 安藤 篤也 | 47 |
| 石井 忠夫 | 48 |
| 石川 洋 | 49 |
| 宇田 隆幸 | 50 |
| 梅原 英一 | 51 |
| 桑原 悟 | 52 |
| 小林 満男 | 53 |
| 近山 英輔 | 54 |
| 河原 和好 | 55 |
| 中田 豊久 | 56 |
| 宮北 和之 | 57 |



学 長

| | |
|------|--|
| 氏名 | オチ トシオ 越智 敏夫 OCHI Toshio |
| 職名 | 学長 (2022年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : tochi@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1986年 立教大学法学部卒業 1992年 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程単位取得満期退学 |
| 職歴 | 1992～1994年 立教大学法学部助手 1994～1996年 シカゴ大学研究員 1996年 新潟国際情報大学専任講師 (1999年 助教授、2006年 教授) 2002～2003年 ニューヨーク大学研究員 2017年 ノースカロライナ大学チャペルヒル校研究員 2018年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校客員教授 |
| 研究分野 | 現代政治理論、政治文化論、アメリカ政治論 |
| 主要業績 | 主要著書 越智敏夫 (2018). 『政治にとって文化とは何か』 ミネルヴァ書房. 越智敏夫 (2007). 「市民文化論の統合的機能：現代政治理論の『自己正当化』について」市川太一・梅垣理郎・柴田平三郎・中道寿一 (編) 『現場としての政治学』 (pp. 89-112). 日本経済評論社. 越智敏夫 (2003). 「なぜ市民社会は少数者を必要とするのか：出生と移動の再理論化」高島通敏 (編) 『現代市民政治論』 (pp.195-216). 世織書房. 主要論文 OCHI, T., “Apocalyptic Memories and Subjective Movements: Differentiation by Political Power in Postwar Japan,” <i>Boundary 2</i> , Summer 2015: Volume 42, Number 3, 55-63. 越智敏夫 (2011). 「強制される忠誠: フィランソロピーとリベラル・ナショナリスト」『年報政治学』 2011-I, 政治における忠誠と倫理の理念化, 93-112. 越智敏夫 (2007). 「アメリカ国家思想の文化的側面：その政府不信と体制信仰について」『政治思想研究』 (7), 32-56. |

国際学部 国際文化学科

臼井 陽一郎

區 建英

小山田 紀子

佐々木 寛

澤口 晋一

申 銀珠

アレクサンドル プラーソル

矢口 裕子

吉澤 文寿

熊谷 卓

小林 伊織

鈴木 佑也

瀬戸 裕之

藤本 直生

山田 裕史

佐藤 泰子

堀川 祐里

ジュリアス マルティネス

シンシア スミス





| | |
|------|---|
| 氏名 | ウスイ ヨウイチロウ 臼井 陽一郎 USUI Yoichiro |
| 職名 | 教授 (2005年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : usui@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1989年 早稲田大学社会科学部卒業 1992年 早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了 1995年 早稲田大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学 |
| 学位 | 修士 (経済学)、MA by research (リーズ大学法学部 法学研究科) |
| 職歴 | 1994 ~ 1996年 早稲田大学社会科学部助手 |
| 研究分野 | EU政治。EU・反EUをめぐるリベラル・モデルとイリベラル・モデルの相克について、司法政治の視点も加味しつつ、統合理論の概念枠組みに引きつけて、理解していく方法の開拓。 |
| 主要業績 | <p>著書</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 臼井陽一郎 (監訳) (2020). 『トライバル化する世界：集会的トラウマがもたらす戦争の危機』 明石書店. ② 臼井陽一郎 (編著) (2020). 『変わりゆくEU:永遠平和のプロジェクトの行方』 明石書店. ③ 臼井陽一郎 (監訳) (2018). 『ダウン症をめぐる政治：誰もが排除されない社会へ向けて』 明石書店. ④ 臼井陽一郎 (編著) (2015). 『EUの規範政治：グローバルヨーロッパの理想と現実』 ナカニシヤ出版. ⑤ 臼井陽一郎 (2013). 『環境のEU、規範の政治』 ナカニシヤ出版. ⑥ 松尾秀哉・臼井陽一郎 (編著) (2013). 『紛争と和解の政治学』 ナカニシヤ出版. ⑦ 中村民雄・須網隆夫・臼井陽一郎・佐藤義明 (2008). 『東アジア共同体憲章案：実現可能な未来をひらく論議のために』 昭和堂. <p>論文</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 臼井陽一郎 (2015). 「EUの対外行動にみる規範政治の諸相—近隣クロスボーダー協力 (ENICBC) を事例に」 『グローバル・ガバナンス』 (2), 68-81. ② 臼井陽一郎 (2015). 「EUのマルチレベル・ガバナンス論—その統合理論としての意義の再考」 『国際政治』 (182), 16-29. ③ 臼井陽一郎 (2009). 「EUの持続性戦略と欧州統合の行方」 『日本EU学会年報』 (29), 83-103. ④ USUI, Y. (2007). The Democratic Quality of Soft Governance in the EU Sustainable Development Strategy : A Deliberative Deficit. <i>Journal of European Integration</i>, 29 (5), 619-633. ⑤ USUI, Y. (2006). The Roles of Soft Law in EU Environmental Governance: An Interface between Law and Politics. 『日本EU学会年報』 (26), 20-62. ⑥ USUI, Y. (2003). Evolving Environmental Norms in the European Union. <i>European Law Journal</i>, 9 (1), 69-87. |
| 所属学会 | UACES (英国EU学会)、日本EU学会 (事務局長)、国際政治学会 日本政治学会、日本比較政治学会、グローバル・ガバナンス学会 (理事) |



氏職
連絡
学方
学歴

オウ ケンエイ

區 建英 OU Jianying
教授 (1998年4月)

E-mail : ou@nuis.ac.jp

1982年 広州外国語大学 日本語文学科卒業

1984年 北京師範大学歴史学系修士課程卒業 (文学修士)

1993年 東京大学大学院博士課程 単位取得満期退学

博士 (学術、東京大学、1993年3月)

1984 ~ 1993年 (中国) 暨南大学歴史学部専任講師

1988 ~ 1995年 学習院大学文学部兼任講師

1993 ~ 1994年 東京大学教養学部客員研究員

1994 ~ 1997年 新潟国際情報大学助教授

2015 ~ 2016年 中国 南開大学客員研究員、北京大学客員教授

1995 ~ 現在 慶應義塾福沢研究センター客員研究員

学職
位歴

受 賞 歴

2021年1月 中国社会科学院日本研究所 第12回優秀論文「隅谷賞」受賞 (「隅谷賞」とは、隅谷三喜男先生の基金によって中国社会科学院で設立された学術賞で、日本研究の優秀論文を表彰するものである)。

研 究 分 野

思想史学：日本政治思想史、中国近代思想史。中国の民主化への関心から思想史を研究する。恩師・丸山眞男先生の思想史学から叡智を吸収して、中国の民主化という課題の研究に活用する。

主 要 業 績

著書

- ① 區建英 (共著) (2022). 「丸山眞男思想中の「永恆與時間」, 「從丸山眞男的「古厝」視點看日本的歷史意識」 黃俊傑・安藤隆穗編『東亞思想交流史中的脈絡性轉換』 (pp. 285-320, 321-357). 國立臺灣大學人文社會高等研究院東亞儒學研究中心.
- ② 區建英 (単訳) (2018). 『福澤諭吉与日本近代化』 (第三版) 原著者・丸山眞男, 北京師範大学出版社.
- ③ 區建英 (単訳) (2016). 『東亜的王権与思想』 原著者・渡辺浩, 上海古籍出版社 (2020年 上製版).
- ④ 區建英 (共著) (2016). 「孫中山「民権主義」的時空轉換與創造」 潘朝陽編『儒家道統與民主共和』 (pp. 41-76), 臺灣師範大学出版社.
- ⑤ 區建英 (共著) (2013). 「嚴復——国民の自由を探し求めた非主流の思想家」 趙景達等編『東アジアの知識人 I 文明と伝統社会』 (pp. 118-134), 有志舎.
- ⑥ 區建英 (共著) (2011). 「日清戦争の衝撃と近代国家形成——中国」, 「侵略と抗日——中国」 米原謙・金鳳珍・區建英『東アジアのナショナリズムと近代』 (pp. 101-143, 249-290). 大阪大学出版会.
- ⑦ 區建英・劉岳兵 (共訳) (2009). 『日本の思想』 原著者・丸山眞男, 生活・読書・新知 三聯書店.
- ⑧ 區建英 (単著) (2009). 『自由と国民 嚴復の模索』 東京大学出版会.
- ⑨ 區建英 (共著) (2005). 「明治立憲政と清末改革」 烏海靖等編『日本立憲政治の形成と変質』 (pp. 141-164), 吉川弘文館.

論文

- ① 區建英 (2019). 「丸山眞男對中國現代性的看法」 『臺灣東亞文明研究學刊』 16 (1), 189-219.
- ② 區建英 (2019). 「丸山眞男思想史的軌跡」 中国社会科学院『日本学刊』 第3期 (「隅谷賞」2021年受賞論文), 136-166.
- ③ 區建英 (2016). 「丸山眞男與福澤諭吉思想中の「獨立自尊」與「他者感覺」」 臺灣大學人文社會高等研究院『臺灣東亞文明研究學刊』 13 (1), 107-146.
- ④ 區建英 (2015). 「丸山眞男の方法と中国思想の省察」 『戦後日本思想と東アジア——知識人と民衆——』 同志社大学人文科学研究所, 人文研ブックレットNo.49, 27-45.
- ⑤ 區建英 (2011). 「丸山眞男と私の中国研究」 東京大学出版会『UP』 vol.462 (April 2011), 51-57.
- ⑥ 區建英 (2008). 「清末中国の国粹派と明治日本の国粹主義」 ソウル大学校奎章閣国学研究院『韓国文化』 41 (6), 158-181.
- ⑦ 區建英 (2008). 「嚴復的“会通”与自由」 『福州大学学报』 [哲学社会科学版] vol.2, 31-36.
- ⑧ 區建英 (1998). 「丸山眞男における国民国家と永久革命」 歴史学研究会編『歴史学研究』 708 (3), 31-40.
- ⑨ 區建英 (1995). 「励みと悲しみ——近代中国と日本」 岩波書店『世界』 1995年3月号, 150-159.
- ⑩ 區建英 (1992). 「福沢諭吉研究と丸山眞男」 みすず書房『みすず』 vol.379 (October 1992), 21-26.

所 属 学 会

中国社会文化学会・アジア政経学会・政治思想学会・日本思想史学会・American Political Science Association

そ の 他

1986年に東京大学大学院で日本思想を研究するために来日。



氏職連絡学
氏職連絡学

オヤマダ ノリコ

小山田 紀子 OYAMADA Noriko
教授 (2005年4月)

E-mail : oyamada@nuis.ac.jp

1978年 津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業

1979～1980年 プロヴァンス大学文学部歴史学研究科修士課程留学(フランス)

1984年 津田塾大学大学院国際関係学研究科博士課程単位取得満期退学

博士(国際関係学) 津田塾大学、2014年2月

1987～1989年 日本学術振興会特別研究員

1987～1991年 神奈川大学外国語学部・法学部非常勤講師

1992～2005年 吉備国際大学社会学部専任講師・助教授(1995年～)

2018～2019年 エクス・アン・プロヴァンス政治学院客員研究員

学職
位歴

研究分野

歴史学、国際関係論、マグレブ近現代史。北西アフリカのマグレブ(狭義には、チュニジア・アルジェリア・モロッコの旧フランス植民地をさす西方アラブ圏諸国)の地域研究を行ってきた。とりわけアルジェリアのフランス植民地化の歴史と脱植民地化の問題を研究対象としている。

主要業績

著書

- ① 小山田紀子「アルジェリア史研究を振り返って」(272-277) 私市正年・スマイル・デベシユ・在アルジェリア日本大使館編著(2014)『日本・アルジェリア友好の歩み』千倉書房
- ② 小山田紀子・渡辺司訳, バンジャマン・ストラ著(2011).『アルジェリアの歴史: フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化(世界歴史叢書)』明石書店. (タイトル別名 Histoire de l'Algérie coloniale, 1830-1954, Histoire de la guerre d'Algérie, 1954-1962, Histoire de l'Algérie depuis l'indépendance, 1962-1988), 701頁
- ③ 小山田紀子「バルバリア海賊とドン・キホーテ」(77-81), 「オスマン帝国とアルジェリア」(82-86)、私市正年編著(2009)『アルジェリアを知るための62章』明石書店
- ④ 小山田紀子「第3章 マグリブの歴史Ⅳ近代・現代(植民地時代) 1. アルジェリアの近現代」(56-70)、宮治一雄・宮治美江子編著(2008)『マグリブへの招待ー北アフリカの社会と文化』大学図書出版.
- ⑤ 小山田紀子「アルジェ」「マグリブ」「オラン」「ハイレッデーン」「メサーリハッジ」「北アフリカの星」「民族解放戦線」「マフザン」「ダルカウイ」「ムクラニー」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編(2002)『イスラーム事典』岩波書店

論文

- ① 小山田紀子(2014)「アルジェリアにおける植民地支配の構造と展開ーフランスの土地政策と農村社会の変容ー」津田塾大学(博士論文), 301頁。
- ② 小山田紀子(2008)「人の移動からみるフランス・アンジェリア関係史ー脱植民地化と『引揚者』を中心にー」『歴史学研究』No846、123-133.
- ③ OYAMADA Noriko (2006), Mediterranean Powers and the 'Algerian Crisis' at the Beginning of the 19th "Century" 『上智アジア学』No.24, 43-62.
- ④ 小山田紀子(2006)「アルジェリア『内戦』の傷跡ー2005年春の旅からー」津田塾大学『国際関係研究所報』第41号, 17-24.
- ⑤ 小山田紀子(2005)「アルジェリア独立戦争と農村社会の変動ー住民再編成の政策をめぐってー」『吉備国際大学社会学部研究紀要』第15号、113-127.
- ⑥ 小山田紀子(2005)「アルジェリアにおける1873年ワルニ工法と私的土地所有権の成立」『国際関係学研究』第31号、津田塾大学、47-65.
- ⑦ 小山田紀子(2003)「幕末日本のフランス公使レオン・ロッシュの生涯(覚書)ーフランス・マグレブ・日本をつなぐ人物像ー」『人間と社会ー知識人の時代批判』吉備国際大学社会学部共同研究成果報告書
- ⑧ 小山田紀子(2001)「アルジェリアにおける1863年元老院決議(土地法)の適用と農村社会の再編ー植民地行政町村の形成をめぐってー」『国際社会学研究所紀要』第8号、41-83.
- ⑨ 小山田紀子(1996)「19世紀初頭の地中海と“アルジェリア危機”ートルコ政権崩壊の過程に関するー考察ー」『歴史学研究』第692号、1-16.
- ⑩ 小山田紀子(1992)「植民地アルジェリアにおける行政町村の形成」『歴史学研究』第633号、26-42.

所属学会
その他

日本中東学会、日本アフリカ学会、歴史学研究会、日本社会学会
国際シンポジウム「植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究」を日仏会館オンラインで開催(2021年3月)。
小山田紀子編著『植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究ーフランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心にー』新潟国際シンポジウム報告書、2021年3月27日。



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴

ササキ ヒロシ
佐々木 寛 SASAKI Hiroshi
教授 (2008年4月)
E-mail : shiroshi@nuis.ac.jp
1996年 中央大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学
法学修士 (中央大学、1993年3月)
1996年～1998年 立教大学法学部助手
1998年～2000年 日本学術振興会特別研究員 (PD)・中央大学法学部兼任講師
2000年～2003年 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師 (～2008年 同大准教授)
2008年～2009年 カルフォルニア大学バークレー校客員研究員

研究分野
主要業績

民主主義理論・安全保障理論
著書・論文・訳書
① 「〈文明〉転換への挑戦 — エネルギー・デモクラシーの論理と実践」『世界』2020年1月号
② 「『エネルギー・デモクラシー』の挑戦 — 新潟県原発検証委員会について」『日本原子力学会誌』Vol.59、No.12、2017年
③ 「政治理論における〈核〉の位置づけに関する若干の考察 — 『3・11』後の政治学のために」『立法法学』第86号 (立教大学)、2012年1月
④ 「『グローバル・シティズンシップ』の射程」『立命館法学』第333・334号 (立命館大学)、2011年3月
⑤ 『地方自治体の安全保障』(明石書店) (共編著)、2010年8月
⑥ 「現代の平和主義」千葉眞編『平和の政治思想史』(おうふう)、2009年8月
⑦ P.ハースト『戦争と権力』(岩波書店) (単訳)、2009年2月
⑧ 「『新しい戦争』と日本—漂流する『安全保障』」岩崎稔他編『戦後日本スタディーズ③』(紀伊國屋書店)、2008年12月
⑨ 「『平和』と『コミュニティ』— グローバル化時代の『暴力』を越えて」宮島喬・五十嵐暁郎編『平和とコミュニティ—平和研究の新次元』(明石書店)、2007年9月
⑩ 『東アジア〈共生〉の条件』(世織書房) (編著)、2006年3月
⑪ 「『戦争』を再考する」岡本三夫・横山正樹編『平和学のアジェンダ』(法律文化社)、2005年5月
⑫ 『東アジア安全保障の新展開』(明石書店) (共編著)、2005年4月
⑬ 「イラク戦争と『安全保障』概念の基層」古城利明編『世界システムとヨーロッパ』(中央大学出版部)、2005年3月
⑭ 「世界政治と市民 — 現代コスモポリタニズムの位相」高島通敏編『現代市民政治論』(世織書房)、2003年2月
⑮ 「Atom-Politics in East Asia : Towards a Border-less Democracy」『情報文化学部紀要』第5号 (新潟国際情報大学)、2002年3月
⑯ 『平和研究 第26号 — 新世紀の平和研究』(早稲田大学出版部) (編著)、2001年11月
⑰ 「グローバルな『全体主義』と『新しい戦争』」『歴史地理教育』第612号、2000年8月
⑱ 「『地球社会』と民主主義原理 — 『オタワ・プロセス』を考える」『立教法学』第55号 (立教大学)、2000年4月
⑲ 「『グローバル・デモクラシー』論の構成とその課題 — D.ヘルドの理論をめぐって」『立教法学』第48号 (立教大学)、1998年2月
⑳ 「平和研究の理論的地平 — 21世紀の平和秩序を求めて」『平和研究』第20号 (日本平和学会)、1996年6月

所属学会 日本国際政治学会 (将来構想委員、2013年研究大会実行委員長)
日本平和学会 (第21期会長) 日本政治学会 (企画委員) など。



氏名
職名
連絡方法
学歴

サワグチ シンイチ

澤口 晋一 SAWAGUCHI Shin-ichi

教授 (2005年4月)

E-mail : sawashin@nuis.ac.jp

1983年 明治大学文学部史学地理学科地理学専攻卒業

1985年 明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士前期課程修了

1992年 明治大学大学院文学研究科地理学専攻博士後期課程単位取得満期退学

学位
学歴

博士 (地理学) 明治大学, 2001年3月

1990 ~ 1992年 日本学術振興会特別研究員

1992 ~ 1996年 明治大学, 東海大学, 国土館大学 非常勤講師

1996年 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師

1999年 同助教授

2005年 同 (現 国際学部) 教授

研究分野

地理学

研究テーマ : ・新潟砂丘と潟の成因に関する地形学的研究

・高緯度極地と中緯度高山山地における地形プロセスの比較研究

・氷河・周氷河地形に基づく氷期の古環境復元

主要業績

著書

① 澤口晋一 (2018). 「越後平野の生い立ち①—川を引き寄せた地殻変動—」他, 新潟市潟環境研究所編『みんなの潟学』(pp.6-7ほか). 新潟市.

② 澤口晋一 (2013). 「化石周氷河現象と氷期の凍土環境の復元」他, 日本第四紀学会編『デジタルブック最新第四紀学 (改訂版)』(pp.154-175). 第四紀学会.

③ 澤口晋一 (2010). 「自然堤防と潟の町—旧巻町と旧西川町—」他, 鈴木郁夫・赤羽孝之編 (2010)『新旧地形図で見る新潟県の百年 — 明治~平成の変貌 —』(pp.88-89). 新潟日報事業社.

④ 澤口晋一 (2005). 「周氷河作用」他, 小疇尚研究室編『山に学ぶ—歩いて観て考える山の自然』(pp.37-60, 126-129). 古今書院.

⑤ 澤口晋一 (2005). 「化石周氷河現象から見た氷期の北上川上流域と北上山地」他, 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編『日本の地形3 東北』(pp.55-59). 東京大学出版会.

論文

① 澤口晋一 (2018). 「新潟市の砂丘地にみられる湖沼とその成因」『平成29年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書』4-14.

② 澤口晋一 (2017). 「新潟砂丘西南端地域の地形」『平成28年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書』115-135.

③ 澤口晋一 (2012). 「アラスカ中部イーグルサミットにおける地温と凍上および斜面物質移動の観測」『地学雑誌』120 (6), 332-341.

④ 澤口晋一 (2007). 「北上川上流域における周氷河インポリューション形成の年代」『季刊地理学』58 (4), 228-236.

その他

① 新潟市潟環境研究所編 (2020)『十二潟ガイドブック』新潟市.

② 新潟市里潟研究ネットワーク編 (2021)『じゅんさい池ガイドブック』新潟市.

③ 新潟市里潟研究ネットワーク編 (2022)『上堰潟・仁箇堤ガイドブック』新潟市.

所属学会
その他

日本地理学会, 日本第四紀学会, 東北地理学会, 東京地学協会

・1990 ~ 1992年および1994年夏期, 北極圏スバルバル諸島調査

・2001, 2002年夏期, カナダ北極圏エルズミア島・アクセルハイベルグ島調査.

・2004年, アラスカ大学フェアバンクス校客員研究員

・2016年~ 2018年, 新潟市潟環境研究所客員研究員

・2019年~新潟市里潟研究ネットワーク会議座長



| | |
|-------------|---|
| 氏名 | 申 銀珠 SHIN Eunju |
| 職名 | 教授 (2001年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : shin@nuis.ac.jp |
| 学籍 | 韓国外国語大学及び大学院 (修士課程) 修了後、 お茶の水女子大学大学院人文科学研究科及び人間文化研究科修了 |
| 学位 | 博士 (人文科学、お茶の水女子大学、1995年3月) |
| 職歴 | 日本学術振興会外国人特別研究員 (1999年5月～2001年3月) |
| 研究分野 | 日本と韓国の近現代文学 現在の研究テーマ：日本統治期の「朝鮮」を描いた韓国と日本の文学作品の研究 |
| 主要業績 | 論文 ① 申銀珠 (2006). 「予感する<女>たち—韓国語訳『ジョゼと虎と魚たち』をめぐって—」菅聡子 (編) 『国文学 解釈と鑑賞 別冊 田辺聖子』 (pp. 240-249). 至文堂. ② 申銀珠 (2006). 「朴景利『土地』に描かれた日本・日本人像」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』9, 19-27. ③ 申銀珠 (2004). 「ソウルの異邦人、その周辺—李良枝『由熙』をめぐって—」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』7, 1-15. ④ 申銀珠 (2002). 「中野重治、詩的憤怒の行方—<君らの叛逆する心は別れの一瞬に凍る>をめぐって」『国文学 解釈と教材の研究』47 (1), 70-77. |
| 所属学会 その他 | 日本近代文学会、朝鮮学会 ソウル大学奎章閣韓国学研究院客員研究員 (2013年～2014年) |



| | |
|------|--|
| 氏名 | アレクサンドル プラーソル Alexander Prasol |
| 職名 | 教授 (2000年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : prasol@nuis.ac.jp |
| 学籍 | 1975年 6月 極東国立大学 (ロシア) 卒業 1978年12月 モスクワ大学日本語学系修士課程修了 |
| 学位 | 文学修士 (PhD, Linguistics, モスクワ国立大学1979年12月) 歴史博士 (Doctor of History, 極東国立大学2005年3月) |
| 職歴 | 1978 ~ 1980年 極東大学東洋学部助手 1980 ~ 1985年 極東大学専任講師 1985 ~ 1991年 極東大学助教授 1981 ~ 1991年 日本学科長 1991 ~ 1999年 新潟大学助教授 2000年~現在 新潟国際情報大学教授 |
| 研究分野 | 社会学 (日本文化・日本教育史・日本史・ロシア文化・ロシア社会史) |
| 担当科目 | ロシア文化論、ロシア史概説、日本文化論、ロシア語 |
| 主要業績 | <p>著書</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Prasol, A. (2022). 『足利政権の衰退』 VKN出版. ② Prasol, A. (2020). 『14世紀における日本権力構造の変容』 VKN出版. ③ Prasol, A. (2018). 『人物に見る歴代徳川将軍』 VKN出版. ④ Prasol, A. (2017). 『日本統一：徳川家康』 VKN出版. ⑤ Prasol, A. (2016). 『日本統一：豊臣秀吉』 VKN出版. ⑥ Prasol, A. (2015). 『日本統一：織田信長』 VKN出版. ⑦ Prasol, A. (2014). 『日本語文型』 VKN出版. ⑧ Prasol, A. (2014). 『日本教育史』 Palmarium Academic出版. ⑨ Prasol, A. (2012). 『江戸から東京まで往復：徳川時代の文化・生活様式・習俗』 アストレリ・コルプス出版. ⑩ Prasol, A. (2010). <i>Modern Japan: Origins of the Mind: Japanese Traditions and Approaches to Contemporary Life</i>. World Scientific Press. ⑪ Prasol, A. (2008). 『日本：時代の相貌—現代社会の伝統とメンタリティー』 ナタリス出版. ⑫ 市岡政夫 (2004). 『自治体外交』 (Prasol, A. ロシア語訳) ダリナウカ出版. ⑬ Prasol, A. (2002). 『明治時代の教育』 ダリナウカ出版. ⑭ Prasol, A. (2001). 『日本教育の成立』 ダリナウカ出版. ⑮ Prasol, A. (1989) 『日本語会話における終助詞』 極東大学出版. ⑯ Prasol, A., & Chan Su Bu, (1984) 『日本語会話』 極東大学出版. <p>論文</p> <ol style="list-style-type: none"> ① Prasol, A. (2022). 「Origin and Aftermath of the Onin War」 『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (7), 13-40. ② Prasol, A. (2019). 「Some Features of the Criminal Situation and Penal System of Japan」 『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (4), 55-72. ③ Prasol, A. (2013). Military-Political Organization and Social Structure of 16th Century Japan. <i>Humanitarian Studies in Eastern Siberia and Far East</i>, (5), 64-75 |
| 所属学会 | ヨーロッパ日本研究学会 (European Association for Japanese Studies) |



| | | |
|----------------|------|--|
| 氏職 連絡 学歴 | 氏名 | ヤグチ ユウコ 矢口 裕子 YAGUCHI Yuko |
| | 職名 | 教授 (2011年4月) |
| 学職 | 学歴 | E-mail : yaguti@nuis.ac.jp 1985年3月 法政大学文学部英文学科卒業 1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了 1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程満期退学 文学修士 (法政大学、1991年3月) |
| | 学歴 | 東京医科歯科大学非常勤講師 (1994年4月～2001年3月) アメリカン大学パリ校客員研究員 (2015年8月～2016年2月) ニューヨーク市立大学客員研究員 (2016年3月～2016年8月) |
| 受賞 研究 分野 | 受賞 | 第3回女性学研究国際奨励賞 (1996年7月14日) |
| | 研究分野 | アメリカ文学、ジェンダー・セクシュアリティ研究。 アナイス・ニン、サム・シェパード等のアメリカ文学をジェンダー・セクシュアリティ研究の視点から再読・再評価する。 |
| 主要業績 | 著書 | ① Yaguchi, Y. (2021). <i>Anais Nin's Paris Revisited: The English & French Bilingual Edition</i> . rose wind-suisseisha. ② Herron, P. (Ed.). (2019). <i>Twittering Machine of Paradise: Glimpses of Two of Anais Nin's Japanese Daughters, 18-30. A Café in Space: The Anais Nin Literary Journal, Anthology 2003-2014</i> . Sky Blue Press. ③ 矢口裕子 (2019). 『アナイス・ニンのパリ、ニューヨークへ旅した、恋した、書いた』水声社。 ④ アナイス・ニン研究会編 (2018). 『近親相姦の家』『人工の冬』18-32. 『憧れの矢』183-186. 「アナイス・ニン ニューヨークの文学地図」189-190. 「分身」「日本におけるアナイス・ニン受容」199-209. 『作家ガイド アナイス・ニン』彩流社。 ⑤ 小林富久子監修 (2014). 「沈黙を歌う—マキシーン・ホン・キングストン『チャイナタウンの女武者』」249-262. 『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』金星堂。 ⑥ 佐々木寛編 (2006). 「境界を吹く風—新しい女性表現と『慰安婦』問題」272-286. 『東アジア〈共生〉の条件』世織書房。 |
| | 論文 | ① Yaguchi, Y. (2018). Singing Silence on the Planet with Maxine Hong Kingston's, <i>The Woman Warrior</i> . 『新潟国際情報大学国際学部紀要』(3), 29-40. ② Yaguchi, Y. (2014). <i>Winter of Artifice: An Odyssey-Anais Nin's Lost Work. A Café in Space: The Anais Nin Literary Journal</i> , 11, 32-40. ③ Yaguchi, Y. (2013). Anais Nin's Buried Child: Translator's Afterword to the Japanese Version of <i>The Winter's Artifice</i> (the Paris Edition, 1939). <i>Nexus: The International Henry Miller Journal</i> , 10, 135-146. ④ 矢口裕子 (2009). 「想像の父を求めて—『インセスト』論への前奏曲」『水声通信』(31), 135-144. ⑤ 矢口裕子 (2009). 「アナイス・ニン『人工の冬』パリ版という旅」『水声通信』(28), 23-35. ⑥ 矢口裕子 (2007). 「『アナイス・ニンの「ジューナ」—『人工の冬』パリ版から」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(10), 57-60. ⑦ Yaguchi, Y. (2007). A Spy in the House of Sexuality: Rereading Anais Nin through <i>Henry & June. A Café in Space: Anais Nin Literary Journal</i> , 4, 22-34. ⑧ 矢口裕子 (2005). 「ロマンティック・クィア—草野マサムネ ジェンダー試論」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(8), 39-50. ⑨ 矢口裕子 (2004). 「アナイス・ニンの娘たち—冥王まさ子と矢川澄子のグリンプス」『新潟ジェンダー研究』(5), 5-12. ⑩ Yaguchi, Y. (2003). <i>Twittering Machine of Paradise—Glimpses of Two of Anais Nin's Japanese Daughters. A Café in Space: Anais Nin Literary Journal</i> , 1, 106-117. ⑪ 矢口裕子 (2003). 「性/愛の家のスパイ—Henry&Juneから読み直す Anais Nin」『英文学研究』(80), 13-25. ⑫ 矢口裕子 (2000). 「『パリ、テキサス』あるいは砂漠のロマンス」『アメリカ演劇』(12), 65-85. ⑬ Yaguchi, Y. (2000). The Imaginary Father. <i>Anais: An International Journal</i> , 18, 46-60. ⑭ Yaguchi, Y. (1998). The Text That Is the Writer—Anais Nin's Diary. <i>Anais: An International Journal</i> , 16, 49-60. ⑮ 矢口裕子 (1996). 「Sam Shepard, <i>A Lie of the Mind</i> — 新しいイヴの歌」『アメリカ文学研究』(32), 57-74. ⑯ 矢口裕子 (1994). 「Sam Shepard, <i>Fool for Love</i> — カウボーイが女を愛する時」『英文学誌』(36), 65-85. ⑰ Yaguchi, Y. (1993). Anais Nin: Another Woman Not in the Novels (II). 『法政大学大学院紀要』(30), 55-74. ⑱ Yaguchi, Y. (1992). Anais Nin: Another Woman Not in the Novels (I). 『法政大学大学院紀要』(28), 67-84. |
| 所属学会 | | 日本アメリカ文学会、日本英文学会、日本女性学会、日本ヘンリー・ミラー協会 アナイス・ニン研究会 |



氏名
職 名
連 名
絡 方
学 法
学 歴

学 位
職 歴

研 究 分 野
主 要 業 績

所 属 学 会
そ の 他

ヨシザワ フミトシ

吉澤 文寿 YOSHIZAWA Fumitoshi
教授 (2011年4月)

E-mail : yosizawa@nuis.ac.jp

1992年3月 東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程卒業

1995年3月 東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了

2004年7月 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了

社会学博士 (一橋大学、2004年7月)

2000年 3月～2002年2月 韓国湖南大学校外国語学部日本語科専任講師

2002年10月～2006年3月 東京学芸大学・青山学院大学・関東学院大学・大東文化大学・明星大学非常勤講師

2006年 4月～2011年3月 新潟国際情報大学情報文化学部准教授

2014年10月～2015年3月 東京大学大学院情報学環客員研究員

2016年 8月～2017年7月 米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校東アジア太平洋研究センター客員研究員

朝鮮現代史、日朝関係史

著書

〔単著〕

① 吉澤文寿 (巖泰奉訳) (2022). 『韓日会談1965 戦後韓日関係の原点を検証する』 イダムブックス (ソウル).

② 吉澤文寿 (李賢周 訳) (2019). 『現代韓日問題の起源 韓日会談と戦後韓日関係』 一潮閣 (ソウル).

③ 吉澤文寿 (2015). 『[新装新版] 戦後日韓関係 国交正常化交渉をめぐる』 クレイン.

④ 吉澤文寿 (2015). 『日韓会談1965 戦後日韓関係の原点を検証する』 高文研.

〔編著〕

① 吉澤文寿 (編) (2021). 『日韓会談研究のフロンティア: 「1965年体制」 への多角的アプローチ』 社会評論社.

② 吉澤文寿 (編) (2019). 『歴史認識から見た戦後日韓関係: 「1965年体制」 の歴史学・政治学的考察』 社会評論社.

③ 吉澤文寿 (編) (2016). 『五〇年目の日韓つながり直し: 日韓請求権協定から考える』 社会評論社.

〔共同執筆〕

① 松本ますみ・清末愛砂 (編) (2021). 『北海道で考える<平和> 歴史的視点から現代と未来を探る』 法律文化社.

② 内海愛子・川上詩朗・吉澤文寿他 (2020). 『日韓の歴史問題をどう読み解くか—徴用工・日本軍「慰安婦」・植民地支配』 新日本出版社.

③ 東北亜歴史財団韓日歴史問題研究所 (編) (2019). 『韓日協定と韓日関係—1965年体制は克服可能か?』 東北亜歴史財団 (ソウル).

④ Nishino, R., Kim, P., & Onozawa, A. (Eds.). (2018). *Denying the Comfort Women Japanese State's Assault on Historical Truth*. Routledge.

⑤ 木宮正史・李元徳 (編) (2015). 『日韓関係史1965—2015 I 政治』 東京大学出版会.

⑥ 李元徳・木宮正史 (編) (2015). 『韓日関係史1965—2015 I 政治』 歴史空間 (ソウル).

⑦ 西野瑠美子・金富子・小野沢あかね (編) (2013). 『「慰安婦」バッシングを越えて「河野談話」と日本の責任』 大月書店.

⑧ 李鍾元・木宮正史・浅野豊美 (編) (2011). 『歴史としての日韓国交正常化 II 脱植民地化編』 法政大学出版局.

⑨ 和田春樹他 (編) (2011). 『ベトナム戦争の時代1960—1975年 (岩波講座 東アジア近現代通史 第8巻)』 岩波書店.

⑩ 永原陽子 (編) (2009). 『植民地責任論—脱植民地化の比較史』 青木書店.

論文・その他

① 吉澤文寿 (2015). 「朴正熙政権期における対日民間請求権補償をめぐる国会論議」 『現代韓国朝鮮研究』 15, 8-16.

② 吉岡古典 (2014). 『日韓基本条約が置き去りにしたもの 植民地責任と真の友好』 大月書店 (吉澤文寿「序文」 iii-v, 「解説」 321-342).

③ 浅野豊美・長澤裕子・吉澤文寿・金鉉洙・薦田真由美 (共編) (2010-2020). 『日韓国交正常化問題資料』 現代史料出版.

歴史学研究会、歴史科学協議会、朝鮮史研究会、日本平和学会、現代韓国朝鮮学会、Association for Asian Studies (AAS) など

日韓会談反対運動に関する日常史研究—日本朝鮮研究所事務局長の日記分析を中心にして (日本学術振興会科学研究費助成事業、研究課題/領域番号19K01005、基盤研究C) など



氏名
職名
連絡方法
学歴
学職
位置

クマガイ タク

熊谷 卓 KUMAGAI Taku

准教授 (2004年4月)

E-mail : takuk@nuis.ac.jp

1991年3月 私立甲南大学法学部法学科卒業

2000年8月 広島大学大学院社会科学研究科後期博士課程法律学専攻単位取得退学

修士 (法学) (広島大学、1994年3月)、博士 (法学) (広島大学、2018年3月)

1995年～1999年 私立広島文教女子大学文学部非常勤講師

1997年～1999年 広島大学法学部助手

1998年～1999年 島根県立国際短期大学国際文化学科非常勤講師

2000年 私立福山大学経済学部非常勤講師

2000年 国立呉工業高等専門学校非常勤講師

2015年～2018年 広島大学法学部客員准教授

2019年～2020年 ニュージーランド・国立オークランド大学法科大学院客員准教授

研究分野

国際法、国際刑事法。テロリズムや麻薬の不法な取引といった、国境を越える犯罪の増加という問題を素材として、現代国際法が、如何にして諸国の多様な利益 (主権) を調整しつつ、国際社会の共通利益 (共通の保護法益) を擁護しているのかということを中心に現在の研究のテーマとしている。

主要業績

著書

- ① 熊谷卓 (2121). 「国連安保理の制裁決議の国内実施と人権一カディ事件」『法判例百選 (第3版)』有斐閣, 224-225.
- ② 熊谷卓 (2010). 「『対テロ戦争』へのジュネーヴ諸条約の適用一ハムダン事件」『国際法判例百選 (第2版)』有斐閣, 224-225.
- ③ 熊谷卓 (2002). 「外交・領事関係」水上千之編著『ファンダメンタル法学講座 国際法』(pp. 117-134) 不磨書房.

論文

- ① 熊谷卓 (2019). 「人質占拠テロ事件と人質の保護：ヨーロッパ人権裁判所2017年4月13日タガエバ (Tagayeva) 事件判決を素材として」『神奈川法学』51 (3), 563-599
- ② 熊谷卓 (2015). 「デジタル時代における国際人権: プライバシー vs. 安全」『国際人権』(26), 34-36
- ③ 熊谷卓 (2013). 「テロリズムと国際人道法の関係に関する一考察 (戦争と平和の法的構想)」『平和研究』(41), 73-101.
- ④ 熊谷卓 (2013). 「判例研究 イラン人に対するの国立大学附置研入学不許可違憲訴訟 [東京地裁平成23.12.19判決]」『季刊教育法』(エイデル研究所) (177), 100-106.
- ⑤ 熊谷卓 (2013). 「国際テロリズムと条約の役割 — 引渡しまたは訴追の規定を中心に —」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(16), 65-80.
- ⑥ 熊谷卓 (2010). 「『対テロ戦争』へのジュネーヴ諸条約の適用一ハムダン事件」『国際法判例百選 (第2版)』有斐閣, 224-225.
- ⑦ 熊谷卓 (2010). 「国際人権法と死刑」『法律時報』82 (7) 日本評論社) 48-52.
- ⑧ 熊谷卓 (2010). 「テロとは何か — 国連包括的テロ防止条約における『テロリズム』の位置づけ —」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(13), 63-70.
- ⑨ 熊谷卓 (2009). 「テロリズムと人権一テロ被疑者の処遇を素材として—」『国際法外交雑誌』108 (2), 91-119.
- ⑩ 熊谷卓 (2008). 「テロリズムを契機とする国家の国際法上の責任に関する序論的考察」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(11), 15-29.
- ⑪ 熊谷卓 (2005). 「対テロ戦争と国際人権法一グアンタナモの被拘束者に対する市民的および政治的権利に関する国際規約 (自由権規約) の適用可能性—」『広島法学』29 (2), 81-116.
- ⑫ 熊谷卓 (2005). 「判例紹介 対テロ戦争と人権一グアンタナモの被拘束者をめぐるアメリカ合衆国連邦最高裁の判断」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(8), 119-133.
- ⑬ 熊谷卓 (2004). 「判例紹介 テロリストと人身保護請求の可否一グアンタナモの被拘束者に関する5つの裁判例から」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(7), 119-159.
- ⑭ 熊谷卓 (2003). 「誰がテロリストを裁くのか? — 合衆国軍事委員会と国際人権法 —」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(6), 87-101.
- ⑮ 熊谷卓 (2002). 「国家テロリズムと国際法一ロッカビー事件を手がかりとして」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』(5), 115-154.
- ⑯ 熊谷卓 (1999). 「フランス共和国におけるテロリズムに対する国内法的規制 (一)」『広島法学』22 (3), 37-60.
- ⑰ 熊谷卓 (1999). 「フランス共和国におけるテロリズムに対する国内法的規制 (二・完)」『広島法学』22 (4), 117-138.
- ⑱ 熊谷卓 (1998). 「犯罪人引渡と国際テロリズム一フランス共和国の立法および判例から」『広島法学』21 (3), 95-133.
- ⑲ 熊谷卓 (1997). 「欧州連合 (EU) と国際テロリズム」『広島法学』20 (3), 203-235.

所属学会

世界法学会・国際法学会・米国国際法学会・国際人権法学会



氏名
職名
連絡方法
学歴

コバヤシ イオリ
小林 伊織 Peter Iori Kobayashi
准教授 (2021年4月)
Email : iorik@nuis.ac.jp
2009年6月 PhD course completed in English Language and Literature, Ateneo de Manila University, Philippines

学歴
職位

2000年6月 MA in East Asian Studies, National Chengchi University, Taiwan
1995年7月 BA (Hons) in South East Asian Studies, University of Hull, UK
MA in East Asian Studies
2022年2月～2022年8月 Trinity College London (英国) CertTESOL在籍
2021年9月～2022年8月 銘伝大学 (台湾) 客員研究員
2003年2月～2015年7月 銘伝大学 (台湾) 英語センター専任講師
2002年9月～2003年6月 台北ヨーロピアン・スクール国際バカロレア日本文学教師
1998年9月～2002年9月 台湾TVBS (無線衛星電視台) 国際ニュースセンター記者

研究分野

World Englishes; English as a Lingua Franca; Language Policy and Planning; English Phonetics and Phonology; Southeast Asian Studies; Chinese Diaspora Studies

主要業績

著書
Kobayashi, P. I. (2020). English in Taiwan. In K. Bolton, B. Werner, & A. Kirkpatrick (Eds.), *The Handbook of Asian Englishes* (pp.547-567). Wiley-Blackwell.
<https://doi.org/10.1002/9781118791882.ch23>

論文

- ① Kobayashi, P. I. (2020). The rise of China and local ethnic Chinese in Cambodia, *Ateneo Chinese Studies Program Lecture Series*, 7, 1-24.
- ② Kobayashi, P. I. (2020). American English phonological features on Singapore radio. *NUIS Journal of International Studies*, 5, 15-26.
- ③ Kobayashi, I. (2012). "American English as an International Language" : Taiwanese views on English, from an EIL / ELF perspective. In *Proceedings for 2012 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics*. Crane, 111-121.
- ④ Kobayashi, I. (2009). Display of Malaysian English in Shirley Geok Lin Lim' s *Sister Swing*. In *Proceedings for 2009 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics*. Taiwan: Crane, 190-201.
- ⑤ Kobayashi, I. (2008). Expanding Circle learners in the Outer Circle: Understanding Taiwanese learners' views on L2 varieties of English. In *Proceedings for 2008 international conference and workshop on TEFL & applied linguistics*. Crane.
- ⑥ Kobayashi, I. (2008). " They speak ' incorrect' English" : Understanding Taiwanese Learners' Views on L2 Varieties of English. *Philippine Journal of Linguistics*, 39, 81-98.

所属学会

International Association of World Englishes (IAWE)
The Japanese Association for Asian Englishes (JAF AE)
The Japan Association for Language Teaching (JALT), Bilingualism SIG
The Japan Association of College English Teachers (JACET), ELFSIG



氏名
職 絡 方 法
連 学 歴

スズキ ユウヤ
鈴木 佑也 SUZUKI Yuya
准教授 (2021年4月)
E-mail : syuya@nuis.ac.jp

学 位
職 歴

2003年3月 上智大学外国語学部ロシア語学科卒業
2006年3月 東京外国語大学大学院地域文化研究課博士前期課程修了
2014年9月 ロシア国立芸術学研究所Ph. Dコース (準博士課程) 修了
2014年9月 東京外国語大学大学院地域文化研究課博士後期課程満期退学
Ph. D (芸術学、ロシア国立芸術学研究所、2015年4月)
博士 (学術、東京外国語大学、2016年12月)

研究分野

2014年10月～現在 東京外国語大学非常勤講師
2014年10月～2019年3月 横浜国立大学非常勤講師
2015年 4月～2020年3月 東京理科大学非常勤講師
2016年 4月～2019年3月 日本学術振興会特別研究員 (PD・横浜国立大学)
2017年 9月～2018年3月 早稲田大学非常勤講師
2018年 4月～2020年3月 上智大学非常勤講師
2018年 4月～2020年3月 東京工業大学非常勤講師
ロシア・ソ連建築史/美術史、表象文化論
主に1930-60年代のソ連における大型建築プロジェクトや都市計画、対外建築交流、政治と建築の相関性について研究している。

主要業績

著書
① 鈴木佑也 (2021). 『ソヴィエト宮殿 建設計画の誕生から頓挫まで』 水声社.
② 横浜国立大学都市科学部 (編) (2021). 『都市科学事典』 春風社. (共著).
③ 沼野充義他 (編) (2019). 『ロシア文化辞典』 丸善出版会. (共著).

論文

- ① 鈴木佑也 (2019). 「ソ連建築界における新たな段階: 第5回世界建築家連合 (UIA) 国際会議モスクワ開催に関する考察」『スラブ文化研究』 16, 22-43.
- ② 鈴木佑也 (2017). 「機能的都市と社会主義都市—近代主義建築と全体主義期ソヴィエト建築の相互関係の導入として」『アヴァンギャルドの知覚』 56-76.
- ③ 鈴木佑也 (2017). 「1930年代から1950年代のソヴィエト絵画作品に見られる建築プロジェクト『ソヴィエト宮殿』とI.スターリンの関係性」『声をさがしつづけて—和田忠彦先生退任記念論文集』, 259-276.
- ④ 鈴木佑也 (2016). 「建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の全体像と建設に関する研究: 狂想と国家を双肩に担ったモニュメント」東京外国語大学博士論文.
- ⑤ Юя СУДЗУКИ (2016). Советский павильон на всемирной выставке в Нью Йорке в 1939 г.: Советский государственный стиль на основе взаимосвязи с американской архитектурой (1939年のニューヨーク万博におけるソヴィエトパビリオン: アメリカ建築との交流を基にしたソヴィエト国家建築様式について). Разнообразие русской культуры 20-го века, 49-56.
- ⑥ 鈴木佑也 (2015). 「国家建築様式からの逸脱または跳躍—建築競技設計後におけるソヴィエト宮殿の「アメリカ化」」『スラブ文化研究』 13, 47-69.
- ⑦ Suzuki, Y. (2015). From Inter-Collision to Transformation of the "National Architectural Style": Suprematism and Soviet Art-Deco in the 1937 Paris International Expositions. Passaggi corporei: percepire, scrivere, incarnare il mutamento, 11-22.
- ⑧ Suzuki, Y. (2015). The Transformation of the Soviet Architectural World in the Totalitarian Era through Contact with American Architecture. Tradition, Translation, Transformation, 59-69.
- ⑨ Юя СУДЗУКИ (2014) ю Конкурс на Дворец Советов 1930-х гг. в Москве и международный архитектурный контекст (1930年代におけるモスクワのソヴィエト宮殿競技設計と国際建築の状況について). 国立芸術学研究所Ph. D論文
- ⑩ Юя СУДЗУКИ (2014). Формирование «нового стиля» в ходе разработки окончательного проекта Дворца Советов. (建築プロジェクト『ソヴィエト宮殿』の最終設計段階における「新たな様式」の形成について). Вестник СПбГУ, 4, 126-139.

その他

- ① 鈴木佑也 (2020). 「地震と社会主義リアリズム-ロシア/ソ連における建築と表象文化 (2)」『不動産経済FAX-LINE』 1264, 5-6.
- ② 鈴木佑也 (2019). 「自然災害と青銅の騎士-ロシア/ソ連における建築と表象文化 (1)」『不動産経済FAX-LINE』 1250, 3-5.
- ③ 鈴木佑也 (2019). 「現代日本写真が伝える眼差しの方法——「記憶と光 日本写真1950-2000 パリ・ヨーロッパ写真館所蔵 大日本印刷寄贈コレクションより」モスクワ展」『artscape』 平成30年6月5日号 (http://artscape.jp/report/topics/10146545_4278.html)

所属学会

日本ロシア文学会、スラブ人文会



氏職
連絡
学方
職歴

学職
位歴

受賞歴

研究分野
主要業績

所属学会

その他

セト ヒロユキ

瀬戸 裕之 SETO Hiroyuki
准教授 (2016年9月)

E-mail : setohiro@nuis.ac.jp

1994年 3月 新潟大学法学部 卒業

1996年 3月 名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士前期課程修了

1998年10月～2001年8月 ラオス国立大学法律政治学部 (留学)

2005年 3月 名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士後期課程満期退学

博士 (学術) (名古屋大学、2009年3月)

2004年 4月～2010年 3月 愛知淑徳大学非常勤講師

2005年10月～2009年 3月 愛知県立大学非常勤講師

2005年 4月～2010年 3月 岐阜市立女子短期大学非常勤講師

2006年 4月～2010年 9月 名古屋外国語大学非常勤講師

2008年 4月～2008年 9月 名古屋大学非常勤講師

2009年 4月～2010年 3月 名城大学非常勤講師

2010年 9月～2012年 3月 京都大学東南アジア研究所機関研究員

2011年 4月～2013年 8月 立命館大学非常勤講師

2012年 4月～2013年 8月 京都大学東南アジア研究所研究員

2012年 4月～2013年 8月 京都大学非常勤講師

2012年 4月～2013年 8月 愛知県立大学非常勤講師

2013年 4月～2013年 8月 龍谷大学非常勤講師

2013年 8月～2015年 9月 名古屋大学大学院法学研究科特任講師 (ラオス・

日本法教育研究センター勤務; 在ラオス)

2015年10月～2016年 8月 名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院・特任准教授
(法学; ラオスサテライトキャンパス事務所勤務)、ラオス・日本法教育研究センター講師 (法研究) を兼任

2016年 4月～2016年 8月 名古屋大学ラオス海外事務所長を兼任

ジェトロ・アジア経済研究所第37回「発展途上国研究奨励賞」受賞 (2016年7月)

ラオス人民民主共和国「友好勲章」受賞 (2017年8月)

東南アジア地域研究 (ラオス研究)、比較政治学、国際関係論

著書

- ① 瀬戸裕之 (2021). 「ラオス人民民主共和国」 鮎京正訓・四本健二・浅野宜之 (編) 『新版 アジア憲法集』 (pp. 459-508). 明石書店.
- ② 瀬戸裕之・河野泰之 (編) (2020). 『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略—避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』 明石書店.
- ③ 瀬戸裕之 (2015). 「政治」ラオス文化研究所 (編) 『ラオス概説 (第2版)』 (pp. 93-124). めこん.
- ④ 瀬戸裕之 (2015). 『現代ラオスの中央地方関係—県知事制を通じたラオス人民革命党の地方支配—』 京都大学学術出版会.
- ⑤ 瀬戸裕之 (2014). 「ラオスの中央集権化と地方分権化に関する—考察—ヴィエンチャン県の開発と治安のバランス—」 鈴木基義 (編著) 『ラオスの開発課題』 (pp. 331-366). JICAラオス事務所.
- ⑥ 瀬戸裕之 (2010). 「ラオス人民革命党—党の発展と改革路線の継続—」 菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一 (編) 『ラオスを知るための60章』 (pp. 186-192). 明石書店.
- ⑦ 瀬戸裕之 (2010). 「国家機構—一党支配体制下の法治国家建設—」 菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一 (編) 『ラオスを知るための60章』 (pp. 193-200) 明石書店.
- ⑧ 瀬戸裕之 (2010). 「中央地方関係—一党中央による—元的な地方支配—」 菊池陽子・鈴木玲子・阿部健一 (編) 『ラオスを知るための60章』 (pp. 201-206). 明石書店.
- ⑨ 瀬戸裕之 (2009). 「ラオス」 鮎京正訓 (編) 『アジア法ガイドブック』 (pp. 267-293). 名古屋大学出版会.

論文

- ① 瀬戸裕之 (2019). 「司法省元高官の視点からみるラオス現代史—フィ・ボンセーナー博士の経験から—」 『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (4), 21-42.
- ② 瀬戸裕之 (2019). 「2015年のラオス憲法改正に関する—考察—人権関連の法規定を中心に—」 『社会体制と法』 (16・17), 32-52.
- ③ 瀬戸裕之 (2016). 「1991年憲法制定前におけるラオス地方議会法制の変遷—1988年地方人民議会選挙とその帰結を中心に—」 『アジア法研究』 (9), 241-260.
- ④ 瀬戸裕之 (2010). 「ラオス人留学生の協力による法整備支援ワークショップ」 『ICD NEWS (法務省法務総合研究所国際協力部報)』 (44), 35-53.
- ⑤ 瀬戸裕之 (2008). 「ラオスの中央地方関係における県知事および県党委員会の権限に関する—考察—ヴィエンチャン県工業局の事業形成過程を中心に—」 『東南アジア研究』 46 (1), 62-100.
- ⑥ 瀬戸裕之 (2005). 「ラオス1991年憲法体制における県党・行政制度に関する—考察—ヴィエンチャン県を事例に—」 『国際開発研究フォーラム』 (28), 181-199.

東南アジア学会、アジア政経学会、日本国際政治学会、国際開発学会、比較法学会、アジア法学会、「社会体制と法」研究会

JICA「ラオス国法律人材育成強化プロジェクト」アドバイザーグループメンバー



氏名
職歴
連絡方法

学位
職歴

研究分野
主要業績

所属学会

その他

フジモト ナオキ

藤本 直生 Naoki Fujimoto-Adamson
准教授 (2014年9月)

E-mail : fujimoto@nuis.ac.jp

1991年3月 日本大学文学部文学専攻 (英文学) (通信教育課程) 卒業

1997年3月 玉川大学文学部教育学科小学校コース (通信教育課程) 修了

1999年9月 University of Essex, UK, Department of Language and Linguistics, MA in English Language Teaching 修了

2011年1月 University of Leicester, UK, School of Education, Doctor of Education (Ed. D.) in Applied Linguistics and TESOL 単位取得満期退学

2000年4月 M.A. in English Language Teaching (ELT)

2012年7月 Master of Education (M.Ed.) in Applied Linguistics & TESOL

1991年 4月～1998年3月 長野県公立中学校英語教員

2001年10月～2002年3月 University of Leicester, UK, Language Centre 日本語講師

2002年 4月～2009年3月 諏訪東京理科大学共通教育センター 非常勤講師

2002年 4月～2009年3月 信州豊南短期大学言語コミュニケーション学科 非常勤講師

2009年 4月～2013年3月 新潟県立大学セルフ・アクセス・センター 学習指導員

2014年 4月～2014年9月 新潟県立大学国際地域学部 非常勤講師

応用言語学、社会言語学、英語教育、English Medium Instruction (EMI)、チームティーチング
著書

- ① Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2021). Translanguaging in EMI in the Japanese tertiary context: Pedagogical challenges and opportunities. In B. A. Paulsrud, Z. Tian, & J. Toth, (Eds.), *English Medium Instruction and Translanguaging*. (pp. 15-28) Bristol, UK: Multilingual Matters.
- ② Fujimoto-Adamson, N. (2020). *Globalisation and Its Effects on Team-Teaching*. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- ③ Fujimoto-Adamson, N., & Adamson, J. L. (2018). From EFL to EMI: Hybrid practices in English as a medium of instruction in Japanese tertiary contexts. In Y. Kirkgoz, & K. Dikilias, (Eds.), *Key Issues in English for Specific Purposes in Higher Education*. (pp. 201-221) Cham, Switzerland: Springer.

論文

- ① Adamson, J. L., Coulson, D. & Fujimoto-Adamson, N. (2019). Supervisory practices in English-medium undergraduate and postgraduate applied linguistics thesis writing: Insights from Japan-based tutors. *Asian Journal of Applied Linguistics*, 6 (1), 14-27.
- ② Adamson, J. L., Stewart, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J., & Masuda, M. (2019). Exploring the publication practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. *The Journal of English Scholars Beyond Borders (ESBB)*, 5 (1), 3-31.
- ③ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2016). Sustaining review quality: Induction mentoring, and community. *The Journal of ESBB*, 2 (1), 29-57.
- ④ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2015). 'I was in their shoes': Shifting perceptions of editorial roles and responsibilities. *The Journal of ESBB*, 1 (1), 109-142.
- ⑤ Adamson, J. L., & Fujimoto-Adamson, N. (2012). Translanguaging in self-access language advising: informing language policy. *Studies in Self Access learning (SiSAL)*, 3 (1), 59-73.
- ⑥ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2012). Revealing shifts and diversity in understanding of self access language of learning. *Journal of University Teaching and Learning Practice*, 9 (1), 1-16.
- ⑦ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2011). Archiving self access: Methodological considerations. *Asian EFL Journal*, 13 (2), 11-33.
- ⑧ Adamson, J. L., Brown, H., & Fujimoto-Adamson, N. (2010). Co-construction and understanding of self-access through conversational narrative. *SiSAL*, 1 (3), 173-188.
- ⑨ Fujimoto-Adamson, N. (2010). Voices from team-teaching classrooms: A case study in junior high school in Japan. *Business Communication Quarterly*, 73 (2), 200-205.
- ⑩ Fujimoto-Adamson, N. (2009). Comparison of qualitative and quantitative approaches to classroom-based team-teaching research. *Bulletin of Shinshu Honan Junior College*, 26, 15-48.
- ⑪ Fujimoto-Adamson, N. (2006). Globalization and history of English education in Japan. *Asian EFL Journal Conference Proceedings*, 8 (3), 259-282.
- ⑫ Fujimoto-Adamson, N. (2005). Comparing team-teaching studies to formulate an appropriate research methodology. *Japan Association of College English Teachers (JACET) Chubu Journal*, 3, 37-57.
- ⑬ Fujimoto-Adamson, N. (2005). A Comparison of the roles of two teachers in a team teaching classroom in a Japanese junior high school. *The Journal of Asia TEFL*, 2 (1), 75-101.
- ⑭ Fujimoto-Adamson, N. (2004). Localizing team-teaching research. *Asian EFL Journal*, 6 (2), 1-16.
- ⑮ Fujimoto-Adamson, N. (2003). Policy and practice of the partnership in the team-teaching classroom: ideology and reality. *Bulletin of Shinshu Honan Junior College*, 20, 143-169.

English Scholars Beyond Borders (ESBB)

Japan Association for Language Teaching (JALT)

JALT College and University Educators (CUE) Special Interest Group

1999年10月 国際ロータリー財団奨学金

2001年10月 British Federation of Women's Grants (BFWG) Charitable Foundation 奨学金

2004年 7月 The Japan Britain Association of English Teaching (JABAET) 研究助成金

2005年10月 The Japan Association of English Teaching (JALT) 研究助成金



氏名
職名
連絡方法
学歴

ヤマダ ヒロシ
山田 裕史 YAMADA Hiroshi
准教授 (2019年4月)
E-mail : hyamada@nuis.ac.jp

学歴
職位

2000年3月 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業
2005年3月 上智大学大学院外国語学研究科国際関係論専攻博士前期課程修了
2008年3月 上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程満期退学
博士 (地域研究) (上智大学、2011年9月)
2008年 4月～ 2011年3月 上智大学アジア文化研究所特別研究員 (PD)
2008年10月～ 2011年3月 東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」
プログラム (HSP) 特任研究員
2011年 4月～ 2014年3月 日本学術振興会特別研究員 (PD・東京大学)
2014年10月～ 2015年3月 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究
機構持続的平和研究センター特任研究員

受賞歴
研究分野

秋野豊ユーラシア基金「第7回秋野豊賞」受賞 (2005年6月)
カンボジア研究、比較政治学、国際協力論
「独裁体制はなぜ続くのか」という問題意識のもと、政党、選挙、議会等の民主的な政治制度が独裁体制の維持にどのような役割を果たしているのか、そのメカニズムを明らかにすべく、カンボジアで40年以上も続く人民党支配について研究しています。

主要業績

【著書】(2013年以降)

- ① 山田裕史 (2022). 「カンボジア：シハヌークによる政治権力の独占と王政の成立」 粕谷祐子 (編) 『アジアの脱植民地化と体制変動：民主制と独裁の歴史的起源』 (pp. 457-484). 白水社.
- ② 山田裕史 (2021). 「人民党政権の対中傾斜とカンボジアの内政動向」 北岡伸一 (編) 『西太平洋連合のすすめ：日本の「新しい地政学」』 (pp. 232-258). 東洋経済新報社.
- ③ 山田裕史 (2015). 「カンボジア人民党による体制維持戦略：議会を通じた反対勢力の取り込み・分断と選挙への影響」 山田紀彦 (編) 『独裁体制における議会と正当性：中国、ラオス、ベトナム、カンボジア』 (pp. 141-176). アジア経済研究所.
- ④ 山田裕史 (2013). 「内戦後のカンボジアにおける平和構築：国軍改革を中心に」 広瀬佳一・湯浅剛 (編) 『平和構築へのアプローチ：ユーラシア紛争研究の最前線』 (pp. 279-299). 吉田書店.
- ⑤ 山田裕史 (2013). 「「ひと」が平和をつくる：カンボジア和平交渉における日本の積極外交」 福武慎太郎・堀場明子 (編著) 『現場〈フィールド〉からの平和構築論：アジア地域の紛争と日本の和平関与』 (pp. 19-43). 勁草書房.

【論文】(2016年以降)

- ① 山田裕史 (2021). 「パリ和平協定30周年から振り返るカンボジアの体制移行」 『IDEスクエア：世界を見る眼』 11, 1-11.
- ② 山田裕史 (2021). 「人民党長期支配下で台頭するカンボジア版「太子党」」 『IDEスクエア：世界を見る眼』 1, 1-11.
- ③ 山田裕史 (2020). 「カンボジア人民党による地方支配の構造：地方議会と地方選挙を中心に」 山田紀彦 (編) 『権威主義体制下の地方議会選挙』 (調査研究報告書). アジア経済研究所.
- ④ 山田裕史 (2019). 「開発下のカンボジアにおける人民党支配：国家と社会に浸透する党」 『アジア研究』 65 (1), 79-95.
- ⑤ 山田裕史 (2016). 「カンボジアの平和構築における市民社会の役割：懸念されるNGO法の影響」 Asia Peacebuilding Initiatives (<http://peacebuilding.asia/civil-society-peace-building-cambodia-ja/>).

所属学会
その他

東南アジア学会、日本比較政治学会、日本国際政治学会、日本平和学会
特定非営利活動法人新潟国際ボランティアセンター (NVC) 運営委員 (2016年5月～現在)、にいがた市民大学運営委員 (2018年4月～現在)、新潟にしかん地域循環共生圏協議会共同副代表 (2020年～現在)



| | |
|------|--|
| 氏名 | サトウ ヤスコ 佐藤 泰子 SATO Yasuko |
| 職名 | 講師 (2019年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : ysato@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1990年 津田塾大学学芸学部英文学科英文学士号 1993年 CENTRAL WASHINGTON UNIVERSITY Graduate Study of Master of Arts – English: Teaching English of Second Language / Teaching English of Foreign Language |
| 学位 | Master of Arts (文学修士号取得) |
| 学歴 | 1992年 Central Washington University 大学附属 ESL研究助手 1993年～1995年 東京家政大学国際交流センター職員 1995年～1999年 同短期大学部国際コミュニケーション科助手 2001年～2008年 同上 家政学部非常勤講師 2008年～2014年 同上 大学人文学部・家政学部非常勤講師 2009年～2013年 東京国際大学言語コミュニケーション学部非常勤講師 2012年～2014年 新潟国際情報大学情報文化学科非常勤講師 |
| 受賞歴 | 2021年10月 第25回日本国際観光学会全国大会学生動画コンテスト「アカデミックアワード」受賞 (佐藤泰子ゼミ) |
| 研究分野 | 英語教育、教育学、観光学・教育 |
| 主要業績 | 論文 ① Sato, Y. (2021). The Effectiveness of Peer-Response Groupwork in CLIL and EFL Classroom Settings: A Collaborative Work in Writing Courses in Japan. <i>NUIS Journal of International Studies</i> , (6), 55-68. ② Sato, Y. (2020). Validation of the EIKEN Tests in Japanese University's English Foundation Course-A Case Study on Teaching EFL Students at NUIS. <i>NUIS Journal of International Studies</i> , (5), 27-37. ③ Sato, Y. (2019). A Comparative Study of MOOCs among Higher Education Institutions in Asian Countries: The Instructor's Perspectives. <i>NUIS Journal of International Studies</i> , (4), 123-130. ④ Sato, Y. (2018). The Case Study of MOOCs for College Students in Japan. <i>KTESOL Proceedings of the 26th Korea TESOL International Conference</i> , 201-209. ⑤ Sato, Y. (2015). An Analysis of Effectiveness of TOEIC Practice with Computer Adaptive Testing (u-CAT) as a Web-Based CALL System. <i>NUIS Journal of International Studies</i> , (1), 91-96. |
| 所属学会 | ・ Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc. (TESOL) ・ The Japan Association for Language Education and Technology (LET) 外国語教育メディア学会 ・ Japan Association for Educational Media Study (JAEMS) 日本教育メディア学会 ・ Japan Society for Educational Technology 日本教育工学会 (JSET) ・ Japan Foundation for International Tourism 日本国際観光学会 (JAFIT) |
| その他 | ・ 2014年～新潟市シティプロモーション認定事業「留学生とともに発信! 食と郷土文化を学ぶ岩室温泉ツアー企画事業」－「IWAMURO」を英語で、一緒に Let's おもてなし!新潟初バイリンガルなまちあるきガイドへの道 ・ 2018年11月～2019年2月 本学中央キャンパス文化講演会「新潟らしい『おもてなし』とは?」－街の魅力再発見・もてなす心、極意を達人に学ぶー (「みなとまち新潟」市民団体等活動助成事業) 連続講演会企画&講師 ・ 2016年～2020年新潟県シニアカレッジ「まちかどふれ愛英会話コース」講師 ・ 2019年～新潟市国際観光課 大型クルーズ船観光客 通訳ボランティア講座担当 ・ 2021年～新潟県観光協会と共同研究 NIIGATA NUIS PROJECTを立ち上げ、所属学生10名が県協会のInstagramを運営、投稿担当 |



氏名
職名
連絡方法

ホリカワ ユウリ
堀川 祐里 HORIKAWA Yuuri
講師 (2019年9月)

E-mail : yuurih@nuis.ac.jp

2006年4月～2010年3月 中央大学 経済学部 公共経済学科
2013年4月～2015年3月 中央大学 大学院 経済学研究科 経済学専攻 博士課程
前期課程
2015年4月～2019年3月 中央大学 大学院 経済学研究科 経済学専攻 博士課程
後期課程

学位
学歴

博士(経済学)(中央大学)(2019年3月)
2010年 4月～2012年9月 西村社会保険労務士事務所
2015年 4月～2019年3月 中央大学 リサーチ・アシスタント
2017年 4月～2019年3月 二葉看護学院 非常勤講師
2018年 9月～2019年3月 國學院大學 非常勤講師
2018年10月～2019年3月 静岡県立大学短期大学部 非常勤講師
2019年 4月～2019年8月 中央大学経済学部 助教
2019年 4月～現在 中央大学通信教育部 インストラクター
2019年 4月～2019年9月 大妻女子大学短期大学部 非常勤講師
2019年 4月～2019年9月 成蹊大学 非常勤講師
2019年 4月～2020年3月 専修大学 非常勤講師
2021年 4月～2022年3月 新潟大学 非常勤講師
2022年 4月～現在 新潟青陵大学短期大学部 非常勤講師

受賞歴
研究分野
主要業績

赤松常子 顕彰会 第49回 赤松賞 (2020年10月)
戦時期の女性労働に関する歴史研究。社会政策、日本経済史、ジェンダー史。
著書

- ① 堀川祐里 (2022). 『戦時期日本の働く女たち』 晃洋書房.
- ② 堀川祐里 (2020). 「戦時期の女性労働員が現代日本に残したもの：『生理休暇』に焦点を当てて」 鳴子博子 (編著) 『ジェンダー・暴力・権力』 (pp. 86-103). 晃洋書房.
- ③ 堀川祐里 (2018). 「戦時期における女性労働政策の展開：総動員体制下の健康と賃金に焦点をあてて」 法政大学大原社会問題研究所／榎一江 (編著) 『戦時期の労働と生活』 (pp. 213-242). 法政大学出版局.

論文

- ① 堀川祐里 (2019). 「戦時期日本の労働員における女性労働者の多様性に関する研究：稼得労働と世代の再生産をめぐる政策のもつ期待の二重性に対する研究者と指導者の主張を糸口に」 博士論文, 中央大学.
- ② 堀川祐里 (2019). 「戦時期における救貧対策としての母子保護法：子どもの育成に対する期待と稼得労働に対する期待の二重性を中心に」 『経済学論纂』 59 (5・6), 333-354.
- ③ 堀川祐里 (2018). 「戦時期の女性労働者動員政策と産業報国会：赤松常子の思想に着目して」 『大原社会問題研究所雑誌』 (715), 44-65.
- ④ 堀川祐里 (2018). 「戦時動員政策と既婚女性労働者：戦時期における女性労働者の階層性をめぐる一考察」 『社会政策』 9 (3), 128-140.
- ⑤ 堀川祐里 (2017). 「戦時期の『女子労務管理研究』と女性労働者の健康：労働科学研究所を中心に」 『中央大学経済研究所年報』 (49), 337-368.
- ⑥ 堀川祐里 (2015). 「赤松常子と『婦人問題』：生理休暇制定要求の背景となる運動と思想を中心に」 修士論文, 中央大学.
- ⑦ 堀川祐里・堀川修平 (2014). 「アメリカの性教育と『包括的性教育のためのガイドライン』」 (特集 日本の性教育を展望する：世界の中の日本) 『季刊セクシュアリティ』 (65), 79-91.

所属学会
その他

社会政策学会、“人間と性”教育研究協議会、ジェンダー史学会
総合女性史学会、日本労働社会学会、日本科学者会議、東京歴史科学研究会
社会政策学会広報委員会委員、社会政策学会春季大会企画委員
中央大学経済研究所客員研究員



氏名
職 連絡方法
連 絡 方 法
学 術 歴

学 位
職 歴

研究分野
主要業績

所属学会

ジュリアス マルティネス

Julius C. Martinez

契約准教授 (CEP) (2021年4月)

E-mail : jcm@nuis.ac.jp

2003 University of the East, Philippines

Bachelor of Secondary Education Major in English

2009 Ateneo de Manila University, Philippines

MA in English Language and Literature Teaching

2019 University of the Philippines-Diliman

PhD in Language Education

PhD in Language Education

2015-2016 Trainer, Pearson Education South Asia

2015-2016 Faculty, Saint John's Catholic School, Indonesia

2013-2015 Lecturer, University of the Philippines - Diliman

2013-2015 Instructor, Ateneo de Manila University, Philippines

2007-2013 English Area Coordinator, Saint John's Catholic School, Indonesia

2005-2007 Faculty, Malayan High School of Science, Philippines

2003-2005 Faculty, Saint Mary's Academy of Caloocan City, Philippines

Multi/translingualism; Sociolinguistics; Language education

著書

- ① Martinez, J., & Martin, I. (forthcoming). Turns in English education in the Philippines. In A. Moody (Ed.), *The Oxford Handbook of Southeast Asian Englishes*. UK: Oxford University Press.
- ② Martinez, J., & Martin, I. (forthcoming). Philippine English. In K. Bolton (Ed.), *The Wiley Blackwell Encyclopedia of World Englishes*. UK: John Wiley & Sons.
- ③ Martin, I., & Martinez, J. (forthcoming). Philippine Englishes within and beyond the Philippines. In K. Burridge and R. Hickey (Eds.), *New Cambridge History of the English Language (Volume VI: English in Africa, Asia, Australasia and the Pacific)*. UK: Cambridge University Press.

論文

- ① Martinez, J., & Bae, K. (forthcoming). A semiotics of demarcation in Manila's Korean Neighborhood. *Linguistic Landscape: An International Journal*.
- ② Martinez, J. (forthcoming). Understanding inequalities in Philippine English through job interviews. *World Englishes*.
- ③ Martinez, J. (2021). A 'new' hierarchy of English teachers: the 'half- native' English teacher as a neoliberal, racialized and gendered subject. *Asian Englishes*. <https://doi.org/10.1080/13488678.2020.1870787>
- ④ Martinez, J. (2021). Recovering translingualism in precolonial Philippines. *International Journal of Multilingualism*. <https://doi.org/10.1080/14790718.2021.1932909>
- ⑤ Martinez, J. (2019). Semiotic resources in everyday communication. *NUIS Journal of International Studies*, 4, 73-90.
- ⑥ Adamson, J., Steward, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J. and Masuda, M. (2019). Exploring the publication practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. *English Scholarship Beyond Borders*, 5 (1), 3-31.
- ⑦ Martinez, J. (2018). Preparing teachers to teach English as an international language. *Asian Englishes*, 20 (2), 186-189. <https://doi.org/10.1080/13488678.2017.1345556>
- ⑧ Martinez, J. (2017). English language education in Japan, Indonesia and the Philippines: A Survey of Trends, Issues and Challenges. *NUIS Journal of International Studies*, 2, 83-93
- ⑨ Martinez, J. (2015). Orchestrating a Pedagogy of Negotiated Voice in Writing. *ACELT Forum*, 9, 2-8.
- ⑩ Martinez, J. (2014). Cross-Fertilizing Original and Simplified Literary Texts. *ACELT Forum*, 8 (1), 10-16.
- ⑪ Martinez, J. (2009). Using Simplified Literary Texts in the English Language Classroom. In *Selected Proceedings of the 2nd RAFIL International Conference on East-West Encounters*. Yogyakarta: Universitas Sanata Dharma.

The Japanese Association for Asian Englishes; Linguistic Society of the Philippines



| | |
|------|---|
| 氏名 | シンシア スミス Cynthia Smith |
| 職名 | 契約講師 (CEP) (2021年5月) |
| 連絡方法 | E-mail : smith@nuis.ac.jp |
| 学歴 | M.A. TESOL Anaheim University (USA), 2012 B.A. Latin American Studies, Smith College (USA), 1994 |
| 学位 | M.A. in TESOL |
| 学歴 | GLT Engage, Portland, Instructor (2020-2021) ; 新潟国際情報大学, CEP Instructor (2016-2019) ; AIR College, Instructor, 2015-2016; Niigata City Board of Education, Assistant Language Instructor, 2013-2014; Instructor, Portland State University (2011-2013) ; Niigata City Board of Education, Assistant Language Instructor (2004-2011) ; GEOS Language Systems, Instructor and Area Liaison to Head Office (1997-2004) |
| 受賞歴 | Award for Academic Excellence, Anaheim University, 2012 |
| 研究分野 | Diversity, Identity, Bilingualism |
| 主要業績 | <p>① Smith, C. (2021, August 21). The natural use and teaching of singular they (Research presentation). North East Asia Regional (NEAR) Language Education Conference, Niigata, Japan.</p> <p>② Smith, C. (2020). Lesbian, mother, foreigner, and educator: Challenges of a multifaceted identity in Japan. In D. H. Nagatomo, K. A. Brown, & M. L. Cook (Eds.), Foreign female English teachers in Japanese higher education: Narratives from our quarter (pp. 193-205). Candlin & Mynard.</p> <p>③ Adamson, J., Steward, A., Smith, C., Lander, B., Fujimoto-Adamson, N., Martinez, J., and Masuda, M. (2019). Exploring the publication Practices of Japan-based EFL scholars through collaborative autoethnography. English scholarship Beyond Borders 5 (1), 3-31.</p> <p>④ Smith, C. & Thukral, L. (2020). Coping with homework: Two intercultural mothers' experiences with their children's schoolwork in Japan. In M. L. Cook & L. G. Kittaka (Eds.), Intercultural families and schooling in Japan: Experiences, issues, and challenges (pp. 94-117). Candlin & Mynard.</p> <p>⑤ Smith, C. (2018). Linguistics of Diversity. Bilingual Japan, 27 (2), 4-10. JALT Bilingualism SIG.</p> <p>⑥ Smith, C. (2017). Creating LGBT-inclusive classrooms (Research presentation). North East Asia Regional (NEAR) Language Education Conference, Niigata, Japan.</p> <p>⑦ Smith, C. (2016). The shy bilingual. Bilingual Japan, 25 (2), 16-19. JALT Bilingualism SIG.</p> <p>⑧ Smith, C. (2013, January). Correcting student errors (Presentation). 新潟県教育委員会主催、文部科学省共催年中学会発表.</p> <p>⑨ Smith, C. (2010, January). Cultural issues facing female ALTs (Workshop). 新潟県教育委員会主催、文部科学省共催年中学会発表.</p> |
| 所属学会 | <p>・ Programs Chair, Niigata Chapter, Japan Association of Language Teachers (JALT)</p> <p>・ Member, Gender Awareness in Language Education, JALT Special Interest Group</p> |

経営情報学部 経営学科

内田 亨

木村 誠

佐々木 宏之

藤瀬 武彦

藤田 晴啓

阿部 聡

小宮山 智志

佐々木 桐子

藤田 美幸

山下 功

今井 裕紀





氏名
職歴

ウチダ トオル

内田 亨 UCHIDA Toru
教授 (2012年4月)

E-mail : uchida@nuis.ac.jp

1985年3月 中央大学文学部文学科英米文学専攻卒業

1999年4月～1999年6月 リヨン経営大学MBA交換留学

2000年3月 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際経営学 (MBA) 修了

2000年6月～2000年7月 リヨン経営大学MBA交換留学

2000年9月～2001年6月 ブリュッセル自由大学医学部交換留学

2004年9月～2005年6月 リヨン第1大学医学部公衆衛生学講座交換留学

2007年3月 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学博士課程修了

博士 (学術、早稲田大学、2007年6月)

経営学修士 (MBA、早稲田大学、2000年3月)

1985年 4月～1990年7月 ライオン株式会社薬品事業部大阪本店営業課課員

1990年 8月～1993年7月 ライオン歯科材料株式会社大阪本店販売促進課課員

1994年 3月～1995年1月 日本ロシユ株式会社試薬本部福岡支店営業課課員

1995年 2月～1998年7月 日本ロシユ株式会社試薬本部PCR (遺伝子診断) ビジネスユニット福岡支店Sales Planning

2004年10月～2005年3月 リヨン経営大学非常勤講師

2007年 4月～2012年3月 西武文理大学サービス経営学部准教授

2016年 4月～2016年9月 新潟大学大学院 技術経営研究科 非常勤講師

2006年度経営情報学会論文賞 (サードオーサー)

水産養殖事業のグローバルビジネスモデルの構築、組織におけるウェルビーイング

著書

① 内田亨・オルシニ フィリップ・マニエー渡邊 馨子・マニエー渡邊 レミー・ベントン キャロライン (2021). 「第5章ワーク・ファミリー・コンフリクト」 長谷川信次 (編) 『コロナ下の世界における経済・社会を描く』 (pp. 103-120). 同文館.

② 内田亨・寺本義也 (2017). 「第7章サービス企業のビジネスモデル (1) 戦略実現の仕組み」 寺本義也・中西晶 (編著) 『サービス経営学入門：顧客価値共創の戦略経営』 (pp. 106-121). 同友館.

③ 内田亨・逆瀬川明宏 (2016). 『経営と組織』 新潟国際情報大学情報文化学部情報システム学科.

④ 内田亨・逆瀬川明宏・オルシニ フィリップ. (2011). 『医療ガバナンス—医療機関のガバナンス構築を目指して (医療経営士上級テキスト 5)』 日本医療企画.

論文・プロシーディング

① Magnier-Watanabe, R., Benton, C., Orsini, P., Uchida, T., & Nagata, K. (2021). Antecedents of Subjective Well-Being at Work: The Case of Japanese Regular Employees. *In Academy of Management Proceedings* (Vol. 2021, No. 1, 10620). Briarcliff Manor, NY 10510: Academy of Management.

② Magnier-Watanabe, R., Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. (2020). Organizational virtuousness, subjective well-being, and job performance: Comparing employees in France and Japan. *Asia-Pacific Journal of Business Administration*, 12 (2), 115-138.

③ Magnier-Watanabe, R., Benton, C. F., Uchida, T., & Orsini, P. (2019). Designing Jobs to Make Employees Happy? Focus on Job Satisfaction First. *Social Science Japan Journal*, 22 (1), 85-107

④ Magnier-Watanabe, R., Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. F. (2018). The Mediating Role of Subjective Well-Being on Organizational Virtuousness and Job Performance : A Comparison between France and Japan. *Journal of Strategic Management Studies*, 10 (1), 5-18.

⑤ Magnier-Watanabe, R., Uchida, T., Orsini, P., & Benton, C. (2017). Organizational Virtuousness and Job Performance in Japan : Does Happiness Matter? *International Journal of Organizational Analysis*, 25 (4), 628-646.

⑥ 内田亨・佐々木宏 (2017). 「水産資源分析によるブリのグローバル戦略製品の可能性」 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 3, 87-97.

⑦ 内田亨・山本靖 (2016). 「新潟県における『プライト企業』の研究—シマト工業株式会社の事例より—」 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 61-70.

⑧ 内田亨 (2013). 「地域の中小企業とそれを取り巻くステークホルダーによる地域ブランド構築のメカニズム」 『地域デザイン学会誌』 2, 133-152.

⑨ 内田亨・山本靖、逆瀬川明宏 (2011). 「日米コーポレート・ガバナンスの課題と日本の経営で共感される価値観：人間的経営を包含した経営哲学を目指して」 『西武文理大学研究紀要』 18, 122-131.

⑩ 内田亨・寺本義也 (2006). 「病院とコミュニティの共進化：専門知と非専門知による価値創造」 『オフィス・オートメーション学会誌』 27 (1), 55-63.

⑪ 平野雅章・須藤秀一・内田亨 (2006). 「医療機関へのBSCの導入と情報マネジメント」 『経営情報学会誌』 14 (4), 85-98.

他34編

学歴

受賞歴
研究分野
主要業績

所属学会
その他

組織学会, 経営情報学会, 日本情報経営学会, 経営品質学会, 国際戦略経営研究学会
新経営革新研究会主宰, 日本経営品質学会理事 (2015年～), 新潟県経営品質
賞委員会委員 (2018年～)



| | |
|------|--|
| 氏名 | キムラ マコト 木村 誠 KIMURA Makoto |
| 職名 | 教授 (2021年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : mkimura@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1983年4月～1987年3月 日本大学 理工学部 物理学科 1997年4月～1999年3月 産能大学 大学院 経営情報学研究科 2000年4月～2003年3月 東京大学 大学院工学系研究科博士課程 先端学際工学専攻 |
| 学位 | 経営情報学修士 1999年3月 |
| 学歴 | 2007年4月～2018年3月 長野大学 企業情報学部 企業情報学科 准教授 2018年4月～2021年3月 公立大学法人 長野大学 企業情報学部 企業情報学科 教授 |
| 受賞歴 | 2021年4月～現在 新潟国際情報大学 経営情報学部経営学科 教授 2018年10月 一般社団法人経営情報学会 2018年度論文賞 2018年10月 日本マーケティング学会 カンファレンス2018オーラルセッションベストペーパー賞 2001年10月 経営情報学会 経営情報学会2001年度論文賞 |
| 研究分野 | 経営情報学, デジタル戦略, プラットフォーム経済, カスタマージャーニーマネジメント, システム・ダイナミクス |
| 主要業績 | ① Kimura, M. (2022). Customer segment transition through the customer loyalty program. <i>Asia Pacific Journal of Marketing and Logistics</i> , Vol.34 No.3, pp. 611-626. https://doi.org/10.1108/APJML-09-2020-0630 ② Kimura, M. (2020). Customer Journey Pathway Analysis from the Perspective of Customer Engagement: A System Dynamics Approach. <i>3rd Asia Pacific System Dynamics Conference in Brisbane</i> , 1-10. ③ 木村誠 (2018). 「カスタマージャーニー (CJ) とカスタマーエンゲージメント (CE) の統合化モデルとシミュレーション」『日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディングス』7, 241-252. ④ 木村誠 (2017). 「クロスサイドネットワーク効果の萎縮効果の類型化 - コンシューマーゲーム産業の2サイド市場モデルとシミュレーション -」『経営情報学会誌』26 (3), 163-186. ⑤ Kimura, M. (2017). The growth stage of Japanese game apps market, <i>2nd Asia-Pacific Region System Dynamics Conference of the System Dynamics Society</i> , 1-19. |
| 所属学会 | 経営情報学会, 組織学会, 日本行動計量学会, 日本システム・ダイナミクス学会, 日本マーケティング学会, Academy of Management, American Marketing Association, Strategic Management Society, System Dynamics Society |
| その他 | 科研費基盤研究 (B) 「プラットフォーム論とエコシステム論を統合するレイヤー戦略論の展開」 研究分担者 |



| | |
|------|--|
| 氏名 | ササキ ヒロユキ 佐々木 宏之 SASAKI Hiroyuki |
| 職名 | 教授 (2020年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : sasakihi@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1996年 東北大学文学部卒業 1998年 東北大学大学院文学研究科博士前期2年の課程修了 2002年 東北大学大学院文学研究科博士後期3年の課程単位取得退学 |
| 学位 | 博士 (文学、東北大学、2003年2月) |
| 学歴 | 2002年4月～2004年3月 日本学術振興会特別研究員 (PD) 2004年4月～2011年3月 新潟中央短期大学幼児教育科専任講師 2011年4月～2018年3月 新潟中央短期大学幼児教育科准教授 2018年4月～2020年3月 新潟国際情報大学経営情報学部准教授 2020年4月～ 新潟国際情報大学経営情報学部教授 |
| 研究分野 | 視知覚におよぼす選択的注意の影響 自己制御の発達と養育の役割 意思決定フレーミング効果の応用研究 |
| 主要業績 | ① 佐々木宏之・林洋一郎 (2022). 「養育に関するメッセージ・フレーミングと制御適合」『慶應経営論集』, 印刷中. ② 佐々木宏之・鈴木達也 (2019). 「サッカーのペナルティキックにおける傾向と対策—2018年W杯ロシア大会の映像分析とPK実験から—」『暁星論叢 (新潟中央短期大学紀要)』, 70, 87-105. ③ 佐々木宏之・林洋一郎 (2017). 「多母集団同時分析による回顧的ペアレンティング尺度の信頼性と妥当性の検討」『慶應経営論集』, 34, 233-246. ④ Sasaki, H. (2016). Object-color associations in preschool children's drawings. <i>Current Psychology</i> , 35, 410-413. ⑤ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2015). Regulatory fit in framing strategy of parental persuasive messages to young children. <i>Journal of Applied Social Psychology</i> , 45, 253-262. ⑥ Sasaki, H. (2014). Visual attention to reference frames affects perceptions of shape from shading. <i>Perceptual and Motor Skills</i> , 118, 850-862. ⑦ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2014). Justice orientation as a moderator of the framing effect on procedural justice perception. <i>Journal of Social Psychology</i> , 154, 251-263. ⑧ Sasaki, H. & Hayashi, Y. (2013). Moderating the interaction between procedural justice and decision frame: The counterbalancing effect of personality traits. <i>Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied</i> , 147, 125-151. ⑨ 佐々木宏之 (2010). 「意思決定フレーミング効果の三類型—幼児の発達と保育の観点を踏まえて—」『暁星論叢 (新潟中央短期大学紀要)』, 60, 55-72. ⑩ Sasaki, H. (2007). Dynamic grouping and interpolation induced by flickering stimuli. <i>Perception</i> , 36, 471-474. ⑪ Sasaki, H. & Kanachi, M. (2005). The effects of trial repetition and individual characteristics on decision making under uncertainty. <i>Journal of Psychology: Interdisciplinary and Applied</i> , 139, 233-246 ⑫ Sasaki, H., Ishi, H., & Gyoba, J. (2004). Effects of gaze perception on response to location or feature. <i>Psychologia</i> , 47, 104-112. ⑬ Sasaki, H. & Gyoba, J. (2002). Selective attention to stimulus feature modulates interocular suppression. <i>Perception</i> , 31, 409-419. |
| 所属学会 | 日本心理学会、日本教育心理学会、日本基礎心理学会、東北心理学会、新潟心理学会 |



氏名
職 絡 方 法 歴
連 絡 方 法 歴
学 位 歴
職 歴
研究分野
主要業績

フジセ タケヒコ

藤瀬 武彦 FUJISE Takehiko
教授 (2002年4月)

E-mail : fujise@nuis.ac.jp

1985年 早稲田大学教育学部教育学科体育学専修卒業
1987年 東海大学大学院体育学研究科体育学専攻修士課程修了
1992年 東海大学大学院医学研究科機能系専攻博士課程修了
体育学修士 (東海大学、1987年3月)
博士 (医学) (東海大学、1992年9月)
1994年4月～1998年3月 新潟国際情報大学専任講師
1998年4月～ 新潟国際情報大学助教授
2002年4月～ 新潟国際情報大学教授

- ① 運動生理学 (ウエイトトレーニング時の酸素消費量及び機械的効率)
② トレーニング科学 (フリーウエイト運動の1RMと競技力との関係)
③ 肥満学 (隠れ肥満及び痩せ願望の実態とボディイメージの歪み)
④ スポーツ史 (オリンピック関連資料の収集と解説)

著書

- ① 藤瀬武彦 (2007). 「筋力をつくるトレーニング」長澤純一編著『体力とはなにか』NAP, 190-206.

論文

- ① 藤瀬武彦 (2022). 「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第四報-1928年第9回アムステルダムオリンピックに関する収集体品-」新潟国際情報大学国際学部紀要, 7, 147-156.
② 藤瀬武彦・他 (2022). 「一般男女大学生の身体組成及び基礎体力に及ぼすコロナ禍における運動習慣の効果-皮下脂肪厚法及びインピーダンス法による体脂肪率等の評価を中心に-」新潟国際情報大学経営情報学部紀要, 5, 21-38.
③ 藤瀬武彦 (2021). 「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第三報-1924年第8回パリオリンピックに関する収集体品-」新潟国際情報大学国際学部紀要, 6, 97-105.
④ 藤瀬武彦・亀岡雅紀・藤田美幸 (2021). 「一般男女大学生の基礎体力に及ぼす新型コロナウイルス感染拡大時の活動自粛の影響-遠隔授業による自宅での運動と体力測定値の妥当性-」新潟国際情報大学経営情報学部紀要, 4, 89-107.
⑤ 藤瀬武彦 (2020). 「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第二報-1920年第7回アントワープオリンピックに関する収集体品-」新潟国際情報大学国際学部紀要, 5, 67-78.
⑥ 藤瀬武彦・亀岡雅紀・橋本麻里 (2020). 「一般男子学生におけるフリーウエイト運動の%1RMでの最高反復回数と酸素消費量-バーベルを用いたベンチプレス及びスクワットにおいて-」新潟国際情報大学経営情報学部紀要, 3, 65-74.
⑦ 藤瀬武彦 (2019). 「スポーツ文化財としてのオリンピック関連資料の収集について 第一報-1912年、1940年、及び1964年夏季オリンピックに関する収集体品-」新潟国際情報大学国際学部紀要, 4, 145-157.
⑧ 藤瀬武彦・橋本麻里・長崎浩爾 (2018). 「女子学生における痩せ願望及び理想体型と実測体型との関連について-形態数値の明らかなモデル選択による理想体型の客観的評価の試み-」新潟国際情報大学経営情報学部紀要, 1, 1-18.
⑨ 藤瀬武彦・橋本麻里・長崎浩爾・他 (2009). 「一般青年男女におけるベンチプレスの1RM相対重量での最高反復回数」トレーニング科学, 21, 225-238.
⑩ 藤瀬武彦・橋本麻里・長崎浩爾・他 (2003). 「歩行トレーニング時の高濃度酸素ガス吸入が皮下脂肪厚及び体周囲に及ぼす効果」新潟体育学研究, 21, 35-45.
⑪ 藤瀬武彦 (2003). 「日本人及び欧米人女子学生におけるボディイメージの比較」体力科学, 52, 421-432.
⑫ 藤瀬武彦・橋本麻里・長崎浩爾・他 (2003). 「短時間劇運動後の回復期における高濃度酸素ガス吸入の効果-血中乳酸値及び運動能力の回復から-」新潟国際情報大学情報文化学部紀要, 6, 143-158.
⑬ 藤瀬武彦 (2003). 「日本人青年女性における体型の自己評価と理想像-アジア人及び欧米人青年女性との比較-」新潟国際情報大学情報文化学部紀要, 4, 105-122.
⑭ 藤瀬武彦・長崎浩爾 (1999). 「青年男女における隠れ肥満者の頻度と形態的及び体力的特徴」体力科学, 48, 631-640.
⑮ 藤瀬武彦・長崎浩爾・岩垣丞恒・他 (1999). 「トレッドミル歩行時の二酸化炭素排出量及び血中乳酸値に及ぼす高酸素吸入の影響」新潟国際情報大学情報文化学部紀要, 2, 221-235.
⑯ 藤瀬武彦・杉山文宏・加藤健志・他 (1998). 「持久的運動鍛錬者の全身持久力に及ぼす高酸素トレーニングの効果」トレーニング科学, 10, 87-96.
⑰ 藤瀬武彦・杉山文宏・加藤健志・他 (1997). 「漸増負荷運動時の高酸素吸入が持久的運動鍛錬者の作業成績及び生理的変量に及ぼす効果」トレーニング科学, 9, 30-38.
⑱ 藤瀬武彦・杉山文宏・松永尚久・長畑芳仁 (1995). 「一般青年男女における筋力評価尺度としてのバーベル挙上能力測定を試み」体育学研究, 39, 403-416.
⑲ Fujise, T., Terao, T., and Nakano, S. (1992). Effects of endurance training under hyperoxia on serum and tissue lipid levels in rats. Tokai J. Exp. Clin. Med., 17, 67-73.
⑳ 藤瀬武彦・内山秀一・寺尾保・中野昭一 (1991). 「ラットの糖・脂質代謝に及ぼす高濃度酸素環境下の持久的トレーニングの影響」体力科学, 40, 208-218.

その他

新潟県パワーリフティング協会理事・北信越学生陸上競技連盟副会長



| | |
|--------|---|
| 氏名 | フジタ ハルヒロ 藤田 晴啓 FUJITA Haruhiro |
| 職名 | 教授 (2012年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : fujita@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1981年3月 宮崎大学農学部草地学科卒業 1983年3月 九州大学大学院農学研究科修士課程修了 1989年2月 キーンズランド大学農学研究科博士研究課程修了 |
| 学位 | Doctor of Philosophy (学術博士 The University of Queensland, 1989年8月) |
| 職歴 | 1989年 4月 農林水産省草地試験場研究員, GIS (地理情報システム) 土地資源研究 1992年 3月 国際農林水産業研究センター, 乾燥地保全研究 国際乾燥地農業研究センター上席研究者併任, 乾燥地資源情報システム International Center for Agricultural Research in Dry Areas (ICARDA) 1995年10月 農林水産省四国農業試験場企画連絡室, 防災システム研究 2000年 7月 日本国際協力システム業務第一部 2003年 4月 東洋大学国際地域学部国際観光学科教授 2005年 4月 東洋大学大学院 国際地域学研究科教授 |
| 受賞歴 | 最優秀科学業績およびコミュニケーション開発賞 Technical Commission VI, 国際写真測量リモートセンシング学会, 1999年4月 |
| 研究分野 | (1) ディープラーニング (深層学習) による物体のクラスター解析・分類問題 (2) データサイエンスによる考古・文化財の保存と復元 (3) GIS (地理情報システム) による空間解析 |
| 主要業績 | ① 藤田晴啓, 山本亮, 河原和好, 市川健太, 南雲彩花 (2022) 「須恵器3D-RGBデータの擬似ラベル教師付分類+クラスターモデル開発とGrad-CAMによるモデル判別の可視化」, 日本情報考古学会第46回大会講演論文集 (投稿中) ② 藤田晴啓, 市川健太, 板垣正敏, 山本亮 (2021) 「マルチヘッド・マルチタスク3D-2D-CNNモデルの開発」, 『考古文化財ディープラーニング研究会発表論文集』, http://id.nii.ac.jp/1608/00003393/ ③ Fujita, H., Itagaki, M., Ichikawa, K., Hooi, Y., K., Kawahara, K., & Sarlan, A. (2020) Fine-tuned Surface Object Detection Applying Pre-trained Mask R-CNN Models, <i>International Conference of Computational Intelligence, IEEE Conference Proceeding</i> , 978-1-5386-5541-2/18. ④ Okuhara, H., & Fujita, H. (2001) Construction of inverse model for data mining by using probabilistic neuralnetwork, <i>Proceedings of 6th International Symposium of Artificial Life and Robotics</i> , 317-320, ⑤ Fujita, H., & Yamamoto, Y. (1997) Estimation of degradation hazard in northern Syria applying a neural network and GIS, <i>Proceedings of the 5th International Workshop on Parallel Image Analysis -Theory and Applications-</i> 82-92 |
| 所属学会 | 情報考古学会, International Society of Biomass and Bioenergy |
| その他 | にいがたGIS推進協議会アドバイザー 東京国立博物館客員研究員 (考古資料デジタルデータの活用研究) |
| 学術助成基金 | Python 機械学習勉強会 in Niigataにてディープラーニング研究教育発表 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B)) 「人類遺産としての先史壁画の保存と公開活用にむけた研究基盤の確立」 (R1 ~ R5) (研究分担者) |
| 科研費 | 基盤研究 (B) (一般) 「須恵器3D-RGBデータの深層学習クラスター解析による型式・年代分類基準の検証」 (R4 ~ R6) (研究代表者) 基盤研究 (B) (一般) 「統計的画像処理と機械学習を併用した文化財のデジタル復元技術の基盤創出」 (R4 ~ R7) (研究分担者) 特定領域研究 中世考古学の総合的研究 (公募) 「自律分散技術を利用したグローバルな中世総合資料情報発信システムの構築」 (H18-19) (研究代表者) |



| | |
|------|--|
| 氏名 | アベ サトシ 阿部 聡 ABE Satoshi |
| 職名 | 准教授 (2016年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : satabe@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 2000年3月 新潟大学人文学部行動科学課程 卒業 2002年3月 新潟大学大学院人文科学研究科修士課程 修了 2011年3月 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程満期退学 |
| 学位 | 修士 (文学) (新潟大学、2002年3月) |
| 学歴 | 2005年 4月～ 2006年3月 新潟経営大学非常勤講師 2005年 4月～ 2011年3月 長岡工業高等専門学校非常勤講師 2005年10月～ 2006年3月 新潟大学非常勤講師 2009年 4月～ 2020年3月 新潟医療福祉大学非常勤講師 2010年 4月～ 2013年3月 新潟国際情報大学非常勤講師 2010年10月～ 2013年3月 新潟大学非常勤講師 2011年 4月～ 2013年3月 北陸大学非常勤講師 2013年 4月～ 2016年3月 会津大学短期大学部社会福祉学科講師 (専任) |
| 研究分野 | 機能言語学、英語教育、談話分析の応用としてのheavy metal studies |
| 主要業績 | ① 阿部聡 (2015). 「童話『かちかち山』再話の比較 -機能言語学的分析に基づく幼児への言語指導に関する一試案- 『会津大学短期大学部研究紀要』 (72) pp.119-127. ② 阿部聡 (2010). 「日本語学術的テキストにおける主題-題述構造と主題進行パターン」 『言語の普遍性と個別性』第1号, 新潟大学現代社会文化研究科. pp.53-68. ③ 阿部聡 (2004). 「日本語のジャンル構造と語彙-文法的資源 -テキスト形成的メタ機能を中心に-」 『現代社会文化研究』 (30) pp. 179-195. ④ 阿部聡 (2004). 「観念構成的比喩としての名詞化」 『欧米の言語・社会・文化』 (10), pp. 1-29. ⑤ 阿部聡 (2002). 「日本語におけるN-Rheme : 書記テキストにおける具現と機能について」 『現代社会文化研究』 (25), pp. 267-283. |
| 所属学会 | 日本機能言語学会 中部地区英語教育学会 日本語用論学会 全国英語教育学会 |



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴
研究分野

コミヤマ サトシ
小宮山 智志 KOMIYAMA Satoshi

准教授 (2004年4月)

E-mail : komiyama@nuis.ac.jp

1994年 中央大学文学部社会学科卒業

1996年 中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

1999年 中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程単位習得退学

社会学修士 (中央大学、1996年3月)

1999年 中央大学文学部社会学科非常勤講師 (2000年に本学着任)

主要業績

情報社会論:社会調査(データサイエンス)・ワークショップなどの手法を用いて“新潟”を活性化させるアイデアを地域の皆様と一緒に考えております。激動する社会環境の中“新潟”の豊かなコミュニティや素晴らしい自然環境を活かして“新潟モデル”を創造するお手伝いができればと考えております。

論文

- ① 小宮山智志 (2021). 「AI時代におけるファシリテーターの重要性について」 (国際交流ファシリテーター特集論文編) -- (教育の新しい形を求めて:「国際交流ファシリテーター」事業の回顧と展望) 『新潟国際情報大学国際学部紀要』 (6), 22-24.
- ② 小宮山智志 (2021). 「新興住宅地における災害時のSNSの情報伝播」 『新潟国際情報大学経営学部 紀要』 4, 1-7.
- ③ 小宮山智志 (2019). 「台湾・日本における“姉妹古民家”の提案」 『新潟国際情報大学経営情報学部 紀要』 2,13-20.
- ④ 小宮山智志, 小林 満男 (2016). 「情報感度の学習成果に及ぼす影響」 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 23-30.
- ⑤ 小宮山智志 (2008). 「モータリゼーションが発達した地方都市における消費者の店舗選択要因の解明」 『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 11. 31-39.
- ⑥ 小宮山智志 (2007). 「コンピュータ活用の差異がE-Learningの評価に及ぼす影響」 『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 10, 99-106.
- ⑦ 小宮山智志 (2004). 「階層線形モデルによる“地域不公平感”の分析」 『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』 6, 161-178.
- ⑧ Komiyama, S. (2000). Perception of “effort,” “Ability,” and “Equal Opportunity” in Japanese Society. Miyano, M., (Ed.), *Japanese Perception of Social Justice: How Do They figure out What Ought to Be*, Ministry of Education, Sports and Culture (pp. 87-100). Grant-in-Aid for Scientific Research (B) Report, 09410050.
- ⑨ 小宮山智志 (2000). 「不公平感の地域間格差研究におけるマルチレベル分析の応用」 『中央大学文学部紀要』 183, 199-213.
- ⑩ 小宮山 智志 (1998). 「消費税・所得税に関する世論についての試論的研究 --消費税増税・所得税減税と消費税減税・所得税増税,どちらを人々は望むか」 『中央大学社会科学研究所年報』 3, 67-79.
- ⑪ 小宮山智志 (1996). 「公正観の深層理解:自由面接データの分析」, 宮野勝編 『社会的公正の研究:理論・実証・応用』 平成4-6年度科学研究費成果報告書 (04401007), 中央大学, 154-165.
- ⑫ 小宮山智志 (1996). 「新聞における公正という言葉の使われ方」 (宮野勝 [編] 『日本人の公正観』 中央大学社会科学研究所報告書 (17), 193-202.

所属学会
その他

数理社会学会、日本社会学会、関東社会学会、日本行動計量学会
新潟市西区拠点商業地活性化推進委員会委員長、魚沼市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進会議会長、魚沼市地域経済活性化協議会委員、佐潟周辺自然環境保全連絡協議会委員、赤塚小学校評議員、内野商店街活性化ワーキングチーム、くろさきワーキングチーム、国際交流ファシリテーター事業専任アドバイザー、中原邸保存会会員、佐潟と歩む赤塚の会会員、支え合いしくみづくりの会『な～とな～』(みずき野・中野小屋等)、西区の住みやすさ研究・実践事業。



氏名
職名
連絡方法
学歴

ササキ トウコ
佐々木 桐子 SASAKI Toko
准教授（2008年4月）
E-mail : tohko@nuis.ac.jp
1994年3月 東洋大学経営学部経営学科卒業
1996年3月 東洋大学大学院経営学研究科経営学専攻修士課程修了
1996年4月～1998年3月 名古屋大学大学院経済学研究科大学院研究生
2001年3月 名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程満期退学
経営学修士（東洋大学、1996年3月）
2001年4月～2008年3月 新潟国際情報大学情報文化学部専任講師
2008年4月～ 同大学准教授
2005年～ 新潟大学経済学部非常勤講師

学位
職歴

研究分野

経営工学, 交通工学, 教育工学
① 生産システム、ロジスティクスシステム、および道路交通システムのシミュレーション分析。
② シミュレーション技術を活用した学習支援システムの開発。

主要業績

- 論文**
- ① Toko SASAKI. (2013). Disaster Management and JIT of Automobile Supply Chain, *Journal of Niigata University of International and Information studies*, 16, 81-95.
 - ② 佐々木桐子 (2010). 「バイオメトリクスのユーザー受容性に関する諸課題～指静脈認証による出席管理システムの事例～」『バイオメディカル・ファジィシステム学会誌』12 (1), 79-86.
 - ③ 佐々木桐子 (2009). 「指静脈認証による出席管理システムの開発」『日本情報経営学会学会誌』29 (4), 49-55.
 - ④ 佐々木桐子 (2009). 「授業支援システム開発：出席管理のすすめ」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』12, 151-162.
 - ⑤ 佐々木桐子 (2007). 「シミュレーション演習におけるe-Learningおよび協調学習の適用」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』10, 107-112.
 - ⑥ 佐々木桐子 (2006). 「高等学校における教科「情報」に関する実態調査および大学入学時の情報リテラシー能力の変化」『オフィス・オートメーション』27 (2), 69-75.
 - ⑦ 佐々木桐子 (2006). 「動機付け教育を目的としたe-Learningコンテンツの開発」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』9, 131-138.
 - ⑧ Toko SASAKI. (2001). A Module-Based Simulation Modeling and Management for Supply Chain Systems on Daily Commodities, *Studies in Informatics and Sciences*, 13, 81-89.
 - ⑨ 佐々木桐子 (2000). 「ロジスティクスシステムのシミュレーションモデリングと解析」『オフィス・オートメーション』20 (3), 76-82, 2000.
 - ⑩ 佐々木桐子 (1998). 「生産・物流システムシミュレーションのモデル化と解析」『オフィス・オートメーション』18 (4-2), 133-136.
 - ⑪ 佐々木桐子 (1997). 「配車・費用を考慮したロジスティクスシミュレーションのモデル化と解析」『オフィス・オートメーション』18 (4), 99-102.

所属学会
その他

日本経営システム学会, 情報システム学会
新潟県地方港湾審議会委員 (2012.6～)
新潟労働局公共調達監視委員会委員 (2015.2～)
新潟労働局新潟県最低賃金審議会委員 (2015.9～)
トラック輸送における取引環境・労働時間改善新潟県地方協議会委員 (2017.7～)
新潟県政府調達苦情検討委員会委員 (2018.1～)
新潟県貨物自動車運送適正化事業実施機関評議委員会委員 (2019.4～)
北陸地方整備局総合評価審査委員会委員 (2019.5～)
(一社) 北陸信越貸切バス適正化センター会長 (2019.6～)
荒川水系流域委員会委員 (2020.1.20～)
新潟県建築審査会委員 (2020.4～)
新潟市環境審議会委員 (2020.8～)
新潟県大規模小売店舗立地審議会委員 (2020.11～)



氏名
職 絡 方 法
連 絡 方 法
学 位
職 歴

フジタ ミユキ

藤田 美幸 FUJITA Miyuki

准教授 (2016年4月)

E-mail : miyu@nuis.ac.jp

2004年3月 新潟大学経済学部経営学科卒業

2007年9月 新潟大学大学院 現代社会文化研究科現代マネジメント専攻 博士前期課程修了

2016年3月 新潟大学大学院 現代社会文化研究科人間形成文化論専攻 博士後期課程修了

学 位
職 歴

博士 (経済学) (新潟大学、2016年3月)

修士 (経営学) (新潟大学、2007年9月)

新潟大学産学地域連携推進機構産学地域人材育成センター、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 博士インターシップ研究員 (2011.5 ~ 2011.11)

新潟大学大学院現代社会文化研究科 リサーチ・アシスタント (2015.4 ~ 2016.3)

チュラロンコン大学ビジネススクール 客員研究員 (2021.8 ~ 2022.8)

研究分野

地域資源とICTを活用したスポーツ&健康ツーリズムにおいて、消費者はどのようにして動機づけが高まるのか、どのように相互に影響し合うのかという課題をテーマとして、経営情報学、マーケティング戦略論、部分的にスポーツ心理学の側面から研究しています。

主要業績

論文 (2014年以降)

- ① 藤田美幸 (2021). 「オンラインスポーツツーリズムにおける参加動機と開催地への愛着に関する研究 - 『東北みやぎオンライン復興マラソン』と『名古屋ウイメンズマラソン2020』の事例から-」 『地域活性研究』 (14), 135-144.
- ② 藤瀬 武彦, 亀岡 雅紀, 藤田 美幸 (2021). 「一般男女大学生の基礎体力に及ぼす新型コロナウイルス感染拡大時の活動自粛の影響 - 遠隔授業による自宅での運動と体力測定値の妥当性-」 『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』 (4), 89-107.
- ③ 藤田美幸 (2020). 「若年層化した個人競技的スポーツにおいてハイパフォーマンスを実現する組織マネジメント - 「スノーボード女性アスリートの強化支援」を事例として-」 『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』 (3), 93-105.
- ④ 藤田美幸 (2019). 「ハイブリッドまちあるきによる地域資源の物語化-2017ふるまちクエストを事例として-」 『モバイル学会誌』 9 (1/2), 1-7.
- ⑤ 藤田美幸 (2018). 「ユーザの動機づけとエンゲージメントの関連」 『日本情報経営学会誌』 38 (3), 83-92.
- ⑥ 藤田美幸, 塚田 麻紀 (2018). 「ゲーミフィケーションを活用したモバイル・ヘルスケアサービス:ドコモ・ヘルスケア「歩いておトク」を事例として」 『日本情報経営学会誌』 38 (3), 74-82.
- ⑦ 藤田美幸 (2017). 「デジタルとアナログの融合による地域活性化プラットフォームモデルの開発 - “ふるまちクエスト” を事例として-」 『モバイル学会誌』 7 (1/2), 23-28.
- ⑧ 藤田美幸 (2017). 「スポーツサービスにおけるモバイルの関係性および影響」 『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 (2), 50-607.
- ⑨ 藤田美幸 (2016). 「ヘルスケアサービスとゲーミフィケーションの親和性-ユーザ特性に着目して-」 『新潟大学現代社会文化研究紀要』 (62), 303-320.
- ⑩ Masayoshi Fukushima, Douglas Schutz, Miyuki Fujita (2016). THE NEED FOR SPEED FOR INNOVATION IN GLOBAL ORGANIZATIONS. Asia Pacific Conference on Information Management 2016, 51-63.
- ⑪ 藤田美幸, 高山誠 (2015). 「モバイルデバイスが引き起こすインスタントイノベーション」 『日本情報経営学会誌』 35 (4), 72-80.
- ⑫ 藤田美幸 (2015). 「産業構造分析における勝敗マトリックスの有用性について-フィットネスクラブ産業への適用-」 『新潟大学現代社会文化研究紀要』 (60), 67-84.
- ⑬ 藤田美幸 (2015). 「日本の社会構造の変化がもたらすICTヘルスケア」 『新潟大学現代社会文化研究紀要』 (59), 163-180.
- ⑭ 藤田美幸, 岡野康弘, 高山誠 (2014). 「超高齢社会とICT化によるスポーツクラブのパーソナイズ市場への変化」 『日本経営スポーツ学会研究年報』 (4), 42-61.
- ⑮ 岡野 康弘, 藤田 美幸, 高山 誠 (2014). 「ゲノム情報解析産業が創造した遺伝子検査市場の今後と課題 - 運動適性予測, 体質・疾病リスク評価などを扱う遺伝子検査をめぐる-」 『日本経営スポーツ学会研究年報』 (4), 62-78.

所属学会

地域活性学会、日本スポーツ産業学会、日本国際観光学会、日本情報経営学会、スマートライフ学会、日本健康心理学会

その他

国土交通省 越後平野生態系ネットワーク推進協議会委員 (2021 ~)

地域活性学会 本部理事 (2021 ~)

新潟市 新潟市財産経営推進計画委員 (2020 ~)

全日本スキー連盟、日本スポーツ振興センター委託事業「女性アスリートの強化支援 (女性アスリートの競技大会等プログラム)」外部評価者 (2018 ~ 2020)

中部スノーボード協会 理事 (1995 ~)

全日本スノーボード学生選手権大会 大会組織委員長 (2012 ~ 2018)

全日本スノーボード選手権中部地区大会 大会組織委員長 (2007 ~ 2018)



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴
研究分野
主要業績

ヤマシタ イサオ

山下 功 YAMASHITA Isao

准教授 (2013年4月)

E-mail : iyamashi@nuis.ac.jp

1996年3月 横浜国立大学経営学部会計・情報学科卒業

1998年3月 横浜国立大学大学院経営学研究科修士課程修了

2009年3月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究所博士課程後期単位取得満期退学

修士 (経営学) (横浜国立大学、1998年3月)

1998年3月～2003年4月 ミツミ電機株式会社 経理部

2007年9月 新潟国際情報大学専任講師

管理会計、原価計算、会計情報システム、公共交通経営

論文

- ① 山下功 (2021). 「カナダ主要都市における公共交通の運賃制度」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』4, 108-117.
- ② 山下功 (2021). 「遠隔授業の実施事例と授業改善」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』4, 134-139.
- ③ 山下功 (2020). 「公共交通事業における日本とカナダの比較—独占と競争—」『年報 財務管理研究』31, 152-158.
- ④ 山下功 (2019). 「エドモントンの公共交通の運賃制度」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』2, 161-172.
- ⑤ 山下功 (2018). 「セグメント情報による新潟交通株式会社の分析」『新潟国際情報大学 経営情報学部 紀要』1, 57-68.
- ⑥ 山下功 (2017). 「旅客運輸事業の利益性に関する考察: 鉄道、バス、タクシー会社のセグメント情報による」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』Vol.3, 61-69.
- ⑦ 山下功 (2016). 「会計ソフトウェアにおける管理会計情報に関する考察」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』Vol.2, 90-95.
- ⑧ 山下功 (2015). 「文系研究室における低予算の産学連携」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』Vol.1, 92-97.
- ⑨ 山下功 (2013). 「大学初年次教育における作文の試行事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部紀要』No.16, 97-103.
- ⑩ 山下功 (2012). 「無料公衆無線LANの現状: 収益・費用構造を中心に」『新潟国際情報大学情報文化学部 紀要』No.15, 81-87.
- ⑪ 山下功 (2011). 「授業評価アンケートシステムの費用対効果: 新潟国際情報大学における導入事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』No.14, 83-91.
- ⑫ 山下功 (2010). 「マークシートによる授業支援システムの費用対効果: 新潟国際情報大学における試行導入事例」『新潟国際情報大学 情報文化学部 紀要』No.13, 115-123.
- ⑬ 山下功 (2005). 「企業間連携における原価管理 組立型総合電子部品メーカーの事例研究」『財務管理研究』16, 101-110.
- ⑭ 山下功 (2005). 「企業間原価管理の事例研究 組立型総合電子部品メーカーの事例」『横浜国際社会科学研究所』9 (6), 95-112.
- ⑮ 山下功 (1998). 『電力事業における原価管理』横浜国立大学大学院経営学研究科修士論文.

所属学会

日本原価計算研究学会、日本管理会計学会、日本財務管理学会、日本会計研究学会、情報システム学会

その他

新潟国際情報大学社会連携センター講師 (2007年度～)

新潟市西区自治協議会委員 (2009年4月～2011年3月)

新潟県下越地区吹奏楽連盟代議員 (2010年度)

新潟市財務会計システム再構築業務 (2015～2017年度)

数学おもしろ講座講師 (2016年度～)

新潟県高齢者大学講師 (2017年度)

アルバータ大学客員教授 (2018年9月～2019年8月)

新潟市次期税系システム再構築業務委託業者選定業務 (2020年7月)

新潟市総務事務システム構築業務委託業者選定業務 (2020年10月)

新潟県立巻総合高等学校評議員 (2021年度～)



| | |
|------|---|
| 氏名 | イマイ ヒロノリ 今井 裕紀 IMAI Hironori |
| 職名 | 講師 (2019年9月) |
| 連絡方法 | E-mail : imai@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 2006年3月 国際基督教大学教養学部人文科学科卒業 2013年3月 慶應義塾大学大学院経営管理研究科経営管理専攻修士課程修了 2019年3月 同志社大学大学院総合政策科学研究科技術・革新的経営専攻一貫制博士課程修了 |
| 学位 | 博士 (技術・革新的経営) (同志社大学、2019年3月取得) |
| 職歴 | 2006年 4月～ 2011年3月 アルプス電気株式会社 2013年 1月～ 2015年3月 西武文理大学サービス経営学部ヒューマンサービスセンター研究員 2016年 4月～ 2020年3月 立教大学経営学部兼任講師 2018年10月～ 2019年3月 横浜国立大学経営学部非常勤講師 |
| 研究分野 | 組織行動論 産業・組織心理学 ① 社会的属性の相互作用と職務ストレス ② 多様な働き方と職業的適応 |
| 主要業績 | ① 今井裕紀・林洋一郎 (2022) 「職務要求がアスピレーションの下方修正を介して抑うつに与える影響—個人資源と職務資源の調整媒介効果—」『慶應経営論集』38 (1), 43-59. ② 今井裕紀・林洋一郎 (2020). 「職務上の資源が職務要求を介してワーク・ファミリー・コンフリクトに与える影響—雇用形態に注目した調整媒介モデル—」『慶應経営論集』37 (1), 1-13. ③ 今井裕紀 (2019). 「慢性疾患を持つ従業員の機能的制限がディストレスとウェルビーイングに与える影響についての研究」同志社大学博士学位論文. ④ Imai, H. (2018). An analysis of the association between functional limitation and distress among employees with chronic illness: Moderating roles of gender and employment status. <i>Doshisha Policy and Management Review</i> , 19 (2), 135-146. ⑤ 今井裕紀 (2017). 「病気と社会的地位が従業員の精神的健康に与える影響」『慶應経営論集』34 (1), 177-185. |
| 所属学会 | 経営行動科学学会 産業・組織心理学会 新潟心理学会 Academy of Management American Psychological Association American Sociological Association |
| その他 | 経営行動科学学会監事2020年4月～ 2022年3月 経営行動科学学会機関誌『経営行動科学』編集委員 (運営担当) 2020年4月～ 2022年3月 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 「不利な属性を持つ従業員のストレスとダイバーシティ風土の効果についての検証」 研究代表者2021年4月～ 2024年3月 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 「組織で働くプロフェッショナルの働きがいの研究: 「仕事の意味」の視点から」 研究分担者2021年4月～ 2024年3月 |

経営情報学部 情報システム学科

安藤 篤也

石井 忠夫

石川 洋

宇田 隆幸

梅原 英一

桑原 悟

小林 満男

近山 英輔

河原 和好

中田 豊久

宮北 和之





氏名
職 務
連 絡
学 科
学 職

アンドウ アツヤ

安藤 篤也 ANDO Atsuya
教授 (2019年10月)

E-mail : atsuya@nuis.ac.jp

1990年3月 北海道大学大学院 工学研究科 情報工学専攻 修士課程修了 修士(工学)

2013年3月 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士課程修了博士(工学)

博士(工学) 筑波大学 2013年3月

1990年4月～2000年3月 日本電信電話株式会社・NTT無線システム研究所(入社)

2000年4月～2003年3月 国際電気通信基礎技術研究所(ATR) 環境適応通信研究所(出向)

2003年4月～2014年6月 NTTアクセスサービスシステム研究所(復帰)

2014年7月～2019年9月 NTT未来ねっと研究所

2014年9月～2020年3月 東京理科大学非常勤講師

2016年6月 電子情報通信学会英文論文誌(C分冊・エレクトロニクス) 論文賞受賞
無線通信

受 賞 歴
研 究 分 野
主 要 業 績

① Shirai, T., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Optimizing sales profit processes using impulse control. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (6), 1887-1905.

② Shirai, T., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Evaluation of production flow system utilizing expected high-volume effect rate. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (4), 1203-1224.

③ Shirai, T., Amano, Y., Ando, A., & Uda, T. (2021). Spatial properties of production flow system based on riemannian manifold structure. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (3), 831-851.

④ Shirai, T., Amano, Y., & Ando, A. (2021). Analytical mechanics approach to conservation in production field. International Journal of Innovative Computing, Information and Control (IJICIC), 17 (1), 67-91.

⑤ 長谷川雅人・長敬三・安藤篤也(2018)。「周波数選択性反射板を用いた2周波数共用水平偏波反射板付ダイポールアンテナ」『電子情報通信学会論文誌』101-B (9), 737-748.

⑥ Cho, K., So, H., & Ando, A. (2016). HPBW control of dipole antenna with frequency selective reflector using different size elements. IEICE Communications Express, 5 (3), 90-94.

⑦ So, H., Ando, A., Seki, T., Kawashima, M., & Sugiyama, T. (2014). Multiband sector antenna with same beamwidth employing multiple woodpile metamaterial reflectors. IEICE Trans. Electron., E97-C (10), 976-985.

⑧ Ueno, S., Ando, A., Seki, T., Takatori, Y., & Hiraguri, T. (2014). Experimental investigations of co-channel interference reduction effect at high elevation base station using beam tilt and orthogonal polarization. Hindawi, International Journal of Antennas and Propagation, 2014 (8), Article ID 532743.

⑨ So, H., Ando, A., Seki, T., Kawashima, M., & Sugiyama, T. (2014). Directional multi-band antenna employing frequency selective surfaces. IET Journals, Electronics Letters, 49 (4), 243-245.

⑩ Ando, A., Kondo, A., & Kubota, S. (2008). A study of radio zone length of dual-polarized omnidirectional antennas mounted on rooftop for personal handy-phone system. IEEE Trans. Veh. Technol., 57 (1), 2-10.

⑪ Ando, A., Taga, T., Kondo, A., Kagoshima, K., & Kubota, S. (2008). Mean effective gain of mobile antennas in line-of-sight street microcells with low base station antennas. IEEE Trans. Antennas Propagat., 57 (1), 3552-3565.

⑫ Ando, A., Taga, T., Kagoshima, K., Kondo, A., & Kubota, S. (1998). Novel microstrip antenna with rotatable patch fed by coaxial line for personal handy-phone system units. IEEE Trans. Antennas Propagat., 56 (8), 2747-2751.

⑬ 山田渉・北直樹・安藤篤也・伊藤俊夫(2008)。「5.2GHz帯ストリートマイクロセル環境における指向性アンテナを用いた基地局間MIMO伝搬特性と伝搬特性推定法」『電子情報通信学会論文誌』91-B (3), 260-271.

⑭ Ando, A., Honma, Y., & Kagoshima, K. (1998). A novel electromagnetically coupled microstrip antenna with a rotatable patch for personal handy-phone system units. IEEE Trans. Antennas Propagat., 46 (6), 794-797.

⑮ 常川光一・鹿子嶋憲一・安藤篤也(1992)。「小形無線機アンテナの多重波中利得と筐体長の関係」『電子情報通信学会論文誌』75-B-II (10), 705-707.

所 属 学 会
そ の 他

電子情報通信学会 (IEICE) 米国電気電子学会 (IEEE)

2017年1月～2017年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)

2019年1月～2019年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)

2020年8月6日 重要産業技術基盤調査勉強会講師 (経済産業省)

2021年1月～2021年3月 筑波大学システム情報工学研究科 学位論文審査委員会委員 (副査)



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴

研究分野
主要業績

イシイ タダオ

石井 忠夫 ISHII Tadao

教授 (2018年4月)

E-mail : ishii@nuis.ac.jp

1980年 山形大学工学部電子工学科卒業

2000年 北陸先端科学技術大学院大学情報処理学専攻博士後期課程修了

工学修士 (山形大学、1982年3月)

博士 (情報科学 北陸先端科学技術大学院大学、2000年3月)

1982年4月～1994年3月 日立製作所計測器事業部 (旧、那珂工場) で理化学
分析装置のコンピュータソフトウェア設計開発に従事

2000年4月～2001年3月 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科教務補佐員

2015年9月～2016年8月 Łódź大学心理学部認知科学科客員教授

1) 非標準論理、特にnon-Fregean logicの体系の研究

2) 構成的型理論に基づいたソフトウェア発展機構の研究

論文

- ① 石井忠夫 (2020). 論理における真理値の複素数表記, 『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』, 4, 1-13.
 - ② Tadao, I. (2018). The definition of sequential machine by PSC, Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics, (1), 19-32.
 - ③ Tadao, I. (2017). Modalities on pair sentential calculus PSC, the 9th International Workshop on Logic and Cognition : Non-classical Modal and Predicate logics, SunYatsen University (広州、中国), December 4-8, 1-3.
 - ④ Tadao, I. (2017). Some syntactical and semantical properties for pair sentential calculus PSC, Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics, (3), 12-26.
 - ⑤ Tadao, I. (2016). SCI for pair-sentence and its completeness, the Conference on Non-Classical Logics, Theory and Applications, University of Łódź, September 5-7, Poland, Vol.8, 61-65.
 - ⑥ Tadao, I. (2016). A syntactical comparison between pair sentential calculus PSC and Gupta's definitional calculus Cn], Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics, (2), 1-13.
 - ⑦ Tadao, I. (2015). A system of pair sentential calculus that has a representation of the Liar sentence, Journal of Niigata University of International and Information Studies Faculty of Business and Informatics, (1), 1-10.
 - ⑧ Tadao, I. (2014). SCI for Pair-Sentence, the 13th Studia Logica International Conference on Trends in Logic XIII, University of Łódź, Poland, 10-12.
 - ⑨ 石井忠夫 (2010). 「構成的型理論に基づいた定理証明プログラムの試作」、『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 13, 71-84.
 - ⑩ 石井忠夫 (2009). 「ソフトウェア仕様とプログラムの導出」、『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 12, 141-150.
 - ⑪ 石井忠夫 (2007). 「ソフトウェア仕様の差分について」、『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』, 10, 147-154.
 - ⑫ Tadao, I. (2006). A formal theory of the calculus of indication, Journal of Niigata University of International and Information Studies Department of Information Systems School of Information and Culture, (9).
 - ⑬ Tadao, I. (2001). An Extension of Martin-Löf's Type Theory with an Evolution Relation, Proceeding of the 34th MLG meeting at Echigo-Yuzawa, January 9-12, Japan, 33-37.
 - ⑭ Tadao, I. (1999). Modality, implication and identity, XLV History of Logic Conference, October 26-27, Jagiellonian University, Kraków, Poland.
 - ⑮ Tadao, I. (1999). A note on varieties of PCI-algebras with EDPC, Bulletin of the Section of Logic, University of Łódź, vol.28, Nr.2, 75-81.
 - ⑯ Tadao, I. (1998). Propositional calculus with identity, Bulletin of the Section of Logic, University of Łódź, vol.27, Nr.3, 96-104.
 - ⑰ Tadao, I. (1997). Propositional calculus with identity, Proceedings of the 31st MLG meeting at Miho, Shimizu, November 24-26, Japan, 22-24.
- 所属学会 日本数学会、日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、情報システム学会
その他 情報システム学会編集委員 (2017年4月～)
情報処理学会IS教育委員 (2020年4月～)



氏名
職名
連絡方法
学歴

イシカワ ヒロシ

石川 洋 ISHIKAWA Hiroshi
教授 (2018年4月)

E-mail : ishihiro@nuis.ac.jp

1986年 静岡大学理学部数学科卒業

1989年 金沢大学大学院理学研究科修了

1998年 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了

博士 (情報科学 北陸先端科学技術大学院大学、1998年3月)

1989年4月 株式会社CSK総合研究所入社、エキスパートシステム開発に従事

1998年4月 福山大学工学部情報処理工学科 助手

2006年4月 福山大学工学部情報処理工学科 専任講師

2007年4月 福山大学人間文化学部メディア情報文化学科 専任講師

2008年3月 新潟国際情報大学情報文化学部情報システム学科 准教授

学歴

研究分野

①形式仕様言語による記述の自動検証に関する研究

②統合開発環境におけるリファクタリングの自動化に関する研究

主要業績

著書

① 高木義和 (主監)・石井忠夫・石川洋・河原和好・小宮山智志・中田豊久・藤田美幸 (2020). 『パソコン学』, 新潟国際情報大学

論文

① Ishikawa, H. (2020). A Case Study of Refactoring with UML Editor Plug-in for Eclipse –Replace Type Code with State/Strategy–. *Proceedings of ITC-CSCC2020*, 49-53.

② Ishikawa, H. (2019). A Simple Example of Refactoring codes with modifying Class Diagram using an Eclipse Plug-in. *Proceedings of ITC-CSCC2019*, OS-03-04.

③ Ishikawa, H. (2018). An Approach to do Big Refactoring by using Eclipse UML Plugin. *Proceedings of 2018 International Conference on Engineering and Natural Science*, 5-17..

④ Ishikawa, H. (2015). Interpreting Implicit VDM Specifications using ProB. *Proceedings of the 12th Overture Workshop on VDM, Newcastle University Computing Science Technical report*, CS-TR-1446, .6-20.

⑤ 石川洋 (2014). 「ProBを用いたVDMの陰仕様の解釈実行の試み」. ソフトウェア工学の基礎XXI, 日本ソフトウェア科学会FOSE2014, 171-176.

⑥ Ishikawa, H. (2012). A Tentative Approach to Program Refactoring with UML Editor Plug-in for Eclipse. *Proceedings of ITC-CSCC 2012*, F-M2-01.

⑦ Ishikawa, H. (2009). An Approach for Refactoring using ESC/Java2. *New Trends in Software Methodologies, Tools and Techniques: Proceedings of the Eighth SoMeT_09*, 61-72.

⑧ Ishikawa, H. (2005). A Specification Construction Unit-based editor for Z. *Proceedings of 29th COMPSAC Workshops and Fast Abstract*, .5-6.

⑨ 石川洋・永井基裕 (2000). 「Z仕様から代数仕様への自動変換に関する考察」. 第20回ソフトウェアシンポジウム論文集, 31-38.

⑩ Ishikawa, H., Watanabe, T., Futatsugi, K. Meseguer, J. & Nakashima, H. (1998). On the Semantics of GAEA. *Proceedings of FLOP*, 123-142.

⑪ Ishikawa, H., Futatsugi, K. & Watanabe, T. (1996). An Example for Concurrent Reflective Computations in Rewriting Logic. First IFIP Workshop on Formal Methods for Open Object-based Distributed Systems, 178-185.

その他

① IS デジタル辞典—重要用語の基礎知識—第二版、編集委員、情報処理学会、情報システムと社会環境研究会 (2019)

<https://ipsj-is.jp/isdic>

② 情報学を専門とする学科対象の教育カリキュラム標準の策定及び提言

(J17-IS報告書) 共著, 情報処理学会・情報処理委員会・情報システム (IS) 教育委員会, 41ページ (2018)

https://www.ipsj.or.jp/annai/committee/education/j07/ed_j17-IS.html

所属学会

日本ソフトウェア科学会、情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、日本数式処理学会、情報システム学会、ACM, IEEE

その他

Guest Researcher, Aarhus University (Denmark) (2013.9 ~ 2014.8)

情報処理学会・情報システム教育委員会委員 (2016.5 ~)

情報処理学会・アクレディテーション委員会委員 (2017.6 ~)



氏名
職名
連絡方法
学歴

ウダ タカユキ
宇田 隆幸 UDA Takayuki
教授 (2016年4月)

E-mail : uda@huis.ac.jp
学部課程：図書館情報大学 (卒業) 学芸学士
修士課程：図書館情報大学大学院 (修了) 修士 (情報学)
博士課程：筑波大学大学院 (中退)、東北大学大学院 (修了) 博士 (情報科学)
博士 (情報科学)、東北大学、2009年9月

学職
位歴

【常勤、正規】
株式会社日本総合研究所 (システム開発職) (9年)、株式会社ジョイン・システム開発 (代表取締役) (9年)、アラン株式会社 (CTO、システム開発事業部長) (13ヶ月)、株式会社ネオジェイエスケー (取締役) (5年)、学校法人岩崎学園 (教職員) (2年)、学校法人近畿大学 (工業高専教授) (6年)

受賞歴

【非常勤】
田園調布学園大学社会福祉学部社会福祉学科 (非常勤講師) (3年)、東京工業高等専門学校情報工学科 (非常勤講師) (3年)
研究成績優秀 図書館情報大学学長 (兼. 筑波大学学長) より賞状授与 (2004年3月)

研究分野

知識処理 (人工知能、自然言語処理、Webマイニング)
社会科学分野・自然科学分野の領域に関してデータ分析・知識発見に関する研究を行っています。研究成果は、実社会での行動指標 (意思決定の材料) になります。

主要業績

論文

- ① Shirai, K., Amano, Y., Ando, A., Uda, T. (2021). OPTIMIZING SALES AND PROFIT PROCESSES USING IMPULSE CONTROL. *International Journal of Innovative Computing, Information and Control*, 17 (6), 1887-1905.
- ② 宇田隆幸・木下哲男 (2010). 「擬似投票方式に基づくハイブリッドフィルタリングシステムにおける推薦予測精度の改良」『情報処理学会論文誌』, 51 (2), 542-554.
- ③ 宇田隆幸 (2009). 「擬似投票方式に基づくハイブリッド型情報推薦システムに関する研究」東北大学 博士学位論文.
- ④ 石川徹也・宇田隆幸 (2006). 「情報フィルタリングの利用システム」『情報の科学と技術』, 56 (10), 458-463.
- ⑤ Uda, T., Kinoshita, T. (2007). Improvement of Pseudo-voting method in Recommender Systems. *Proc. 1st. Int. Workshop on Information Credibility on the Web (WISCOW07)*, JSAI, 41-48.
- ⑥ 宇田隆幸・藤井敦・石川徹也 (2005). 「テキスト情報を対象としたハイブリッド型情報推薦システムにおける擬似投票方式」『情報処理学会論文誌』, 45 (5), 1246-1255.

その他

- ⑦ 宇田隆幸 (2014). 「名張市民意識調査アンケートの分析」名張市宛報告書.
- ⑧ 宇田隆幸 (2014). 「名張商工会議所における貸室管理システムについての分析報告」名張市商工会議所宛報告書.
- ⑨ 宇田隆幸 (2013). 名張市民意識調査アンケートの分析. 名張市宛報告書.
- ⑩ 宇田隆幸・藤井敦・石川徹也 (2004). 情報推薦方式. (特許 20046281).
- ⑪ [実務実績] (2002). シニア世代におけるWWWコミュニティ利用促進に関する研究報告.
- ⑫ [実務実績] (1999). ゴルフ場予約システム (現. 楽天GORA) 開発.
- ⑬ [実務実績] (1996). CDMA基地局研究・開発.
- ⑭ [実務実績] (1989). VAN NP 通信プロトコルコンバータ開発.
- ⑮ [実務実績] (1984). ファームバンキング用通信プロトコル策定およびシステム設計・開発 (エミュレータ開発).
- ⑯ 宇田隆幸 (1983). 情報入力装置. (特許 昭58-237125).

所属学会
その他

情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、日本教育工学会
公益財団法人図書館振興財団 専門書・学術書選書委員会 選書員 (2015年4月～)
新潟市水道事業経営審議会委員 (2017年9月～)
国土 (魚沼市土) 利用計画 魚沼市審議会委員 (2017年10月～ 2019年3月)
弥彦村学校運営協議会委員 (2019年4月～)
弥彦村教育委員会 第3期弥彦村教育振興基本計画策定委員 (2020年9月～ 2021年3月)



| | |
|--------------|---|
| 氏名 | ウメハラ エイチ 梅原 英一 UMEHARA Eiichi |
| | 教授 (2021年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : umehara@nuis.ac.jp |
| | 東京工業大学工学部経営工学科 |
| 学歴 | 東京工業大学大学院総合理工学研究科システム科学専攻修士課程修了 |
| | 電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程修了 |
| 学位 | 博士 (工学)、電気通信大学、2006年3月 |
| | 川崎製鉄株式会社 (現JFE) (2年5ヶ月) |
| 受賞歴 | 株式会社野村総合研究所 (29年) |
| | 東京都市大学メディア情報学部情報システム学科教授 (8年7ヶ月) |
| 研究分野 主要業績 | 2006年 9月 日本社会情報学会論文奨励賞 |
| | 2013年10月 経営情報学会論文賞 2020年 2月 日本印刷学会論文賞 |
| | 経営情報システム、社会情報システム |
| | ① Ueda, K., Sasaki, J., Suwa, H., Ogawa, Y., Umehara, E., Yamashita, T., Tsubouchi, K., Yasumoto, K. (2021) Prediction of Nikkei VI increase for reducing investment risk using Yahoo! JAPAN stock BBS, <i>The 6th International Workshop on Application of Big Data for Computational Social Science in WI-IAT '21</i> . |
| | ② 梅原英一 (2021) 「大学図書館のデジタル・トランスフォーメーションに対する組織のIT活用能力」『日本印刷学会誌』 58 (1), 18-22. |
| | ③ 林浩輝, 梅原英一, 小川祐樹 (2020) 「否決された大阪都構想のTwitter投稿における世論形成理論成立の考察」『社会情報学』 第8巻3号, pp.165-175. |
| | ④ 梅原英一, 加藤奈美恵, 諏訪博彦, 小川祐樹, 杉浦昌 (2020). 「組織における個人情報保護行動モデルの構築—従業員の個人情報保護行動を促進するためには—」『社会情報学』 第8巻3号, pp.81-95. |
| | ⑤ Sasaki, K., Suwa, H., Ogawa, Y., Umehara, E., Yamashita, T., Tsubouchi, K. (2020) Evaluation of VI Index Forecasting Model by Machine Learning for Yahoo! Stock BBS using Volatility Trading Simulation, <i>Proceedings of HICSS2020 (Hawaii International Conference on System Science)</i> . |
| | ⑥ 渡部和雄, 梅原英一, 岩崎邦彦 (2019) 「紙出版物利用者と紙・電子出版物併用者の意識や行動の計量分析」『日本印刷学会誌』 第56巻3号, pp.146-15. |
| | ⑦ 渡部和雄, 梅原英一, 岩崎邦彦 (2016) 「消費者のO2O (Online to Offline) 行動の差異に基づいた消費者特性の分析と実店舗への誘導への示唆」『情報処理学会論文誌』 Vol.57, No.8, pp.1887-1897. |
| | ⑧ K.Watabe, K.Iwasaki, E.Umehara (2015) Factors and Models for Promoting Consumer Use of Electronic Money, <i>International Journal of Japan Association for Management Systems</i> , pp7-14. |
| | ⑨ 諏訪博彦, 梅原英一, 太田敏澄 (2012) 「インターネット株式掲示板の投稿内容分析に基づくファクターモデル構築の可能性」『人工知能学会論文誌』 27巻6号, pp.376-383 |
| | ⑩ 梅原英一 (2012). 「情報システム障害に関するITベンダーとの契約におけるゲーム理論による分析」『経営情報学会誌』 第21巻1号, pp.1-13 |
| | ⑪ E. Umehara, T. Ohta (2011) Game of Risk Communications-The Case of a Japanese Carmaker, <i>IEEE Transactions on Systems, Man, and Cyberneticspart A</i> , Vol.41, No.4, pp.651-661. |
| | ⑫ E. Umehara, T. Ohta (2009) Using Game Theory to Investigate Risk Information Disclosure by Government Agencies and Satisfying the Public - The Role of the Guardian Agent, <i>IEEE Transactions on Systems, Man, and Cyberneticspart A</i> , Vol.39, No.2, pp.321-330. |
| | ⑬ 丸山健, 梅原英一, 諏訪博彦, 太田敏澄 (2008) 「インターネット株式掲示板の投稿内容と株式指標の関係」『証券アナリストジャーナル11月・12月合併号』 pp.110-127. |
| | ⑭ 梅原英一, 太田敏澄 (2008) 「情報システムの統治組織の有効性比較」『経営情報学会誌』 第17巻2号, pp.39-59. |
| 所属学会 | 経営情報学会、社会情報学会、情報処理学会、人工知能学会 |
| その他 | 横浜市本人確認情報等保護審議委員会委員 (2013 ~ 2016) 東京都市大学名誉教授 (2021年4月より) |



| | |
|------|--|
| 氏名 | クワハラ サトル 桑原 悟 KUWAHARA Satoru |
| 職名 | 教授 (2008年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : kuwahara@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1977年3月 東京都立工業高等専門学校機械工学科卒業 1981年3月 東京農工大学工学部数理情報工学科卒業 1983年3月 東京農工大学大学院工学研究科修了 2008年3月 東京農工大学大学院博士後期課程単位取得満期退学 |
| 学位 | 工学修士 (東京農工大学、1983年3月) |
| 学職 | 1983年4月～2000年6月 三菱電機株式会社 情報システム技術センタ 専任 2000年7月～2001年3月 KPMGビジネスアシュアランス株式会社 シニアマネージャ |
| 研究分野 | 情報セキュリティ。情報化社会の充実には、テクノロジーの発展とそれを実社会で利用するフレームワークの構築が重要である。特にインターネットのようなオープンネットワークにおいて、個人や組織の情報の完全性、可用性、機密性を確保するためのテクノロジーと利用のためのフレームワークについて研究を行っている。 |
| 主要業績 | 論文 ① 桑原悟 (2007). 「初心者プログラミング環境に関する一考察」『情報処理学会 情報科学技術フォーラム』, 2007 (6 (4) 411-414 (2007-08-22)) ② 桑原悟.(2005). 「e-Japan/u-Japan における一般利用者のための情報セキュリティ認知の社会環境に関する一考察」『情報処理学会情報システムと社会環境 (IS)』, 2005 (115 (2005-IS-094)), 7-13. ③ 桑原悟 (2005). 「ビジネスアプリケーションのための新しいアクセス管理の視点」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』8, 191-203. ④ 桑原悟 (2003). 「大学の役割とIT化に関する一考察」『情報処理学会研究報告情報システムと社会環境 (IS)』, 2003 (97 (2003-IS-085)), 9-14. |
| 所属学会 | 情報処理学会 情報システム学会 日本リスク学会 |
| その他 | ・CISA (Certified Information Systems Auditor) ・CISM (Certified Information Security Manager) ・東京農工大学 非常勤講師 (2002 ～) ・情報処理技術者試験 (経済産業大臣所管) 試験委員 (1992 ～ 2012) ・Visiting Professor, University of Alberta (2007) ・第二種電気工事士、認定電気工事従事者、第三種電気主任技術者 |



氏名
職名
連絡方法
学歴

コバヤシ ミツオ
小林 満男 KOBAYASHI Mitsuo
教授 (2011年4月)

E-mail : mitsuo@nuis.ac.jp

1976年 3月 仙台電波工業高等専門学校電波通信学科卒業

1985年 3月 東京理科大学工学部II部電気工学科卒業

1998年 3月 産能大学大学院経営情報学研究所修士課程修了

2006年 3月 埼玉大学大学院経済科学研究科博士後期課程修了

博士 (経済学、埼玉大学、2006年3月)

1976年 4月 日本電信電話公社入社。自動車電話方式・デジタルマイクロ波方式・衛星通信システム等の開発・導入及び法人営業・SEに従事

2011年 3月 NTTコミュニケーションズ株式会社を退職

1989年10月 NTT社長表彰 (衛星中継網方式の実用化) 小林満男他9名

2008年 6月 最優秀論文賞 (26th AIAA, ICSSC2008) 田中将義・坂本宏・小林満男・北山行治

学職
位歴

受賞歴

研究分野

主要業績

(1) 企業、公共分野における情報通信システムの利活用の研究

(2) 競争戦略形成プロセスの研究

著書

① 小林満男 (2019). 「第11章 人的資源管理」高橋正泰 (監修). 竹内倫和・福原康司 (編) 『ミクロ組織論』 (pp. 195-213). 学文社.

② 小林満男訳 (2012). 「第13章 ディスコースとパワー」高橋正泰・清宮徹 (監訳) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』 (pp. 473-502). 同文館出版.

論文

① 小林満男. (2015) 「PBLによる情報システム開発教育の実践」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』1, 18-26.

② Tanaka, M., Sakamoto, H., Kobayashi, M., & Kitayama, Y. (2014). Estimation of unwanted spurious domain emissions from a multicarrier transmitter. *IEEE Transactions on Aerospace and Electronic Systems*, 50 (3), 2293-2303.

③ 小林満男. (2015) 「新潟国際情報大学における情報システム教育改善の取り組み」『情報処理』55 (9), 1008-1011.

④ 小林満男・小宮山智志・上西園武良 (2014) 「緩やかなインタラクションを重視した情報システム教育の実践」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』17, 111-121.

⑤ Tanaka, M., Sakamoto, H., Kobayashi, M., & Kitayama, Y. (2008). Unwanted Emissions of Multi-carrier Transmitter in Spurious Domain, 26th AIAA International Communications Satellite Systems, AIAA ICSSC2008, AIAA-2008-5464, 2008.

⑥ 田中将義・坂本宏・小林満男・北山行治 (2008). 「マルチキャリア運用時の送信機からのスプリアス領域発射の検討」『信学技報』108 (58), 7-12.

⑦ 小林満男 (2005) 「法人営業現場における持続的競争優位の構築」『埼玉大学経済科学論究』2, 43-60.

⑧ 小林満男 (2004) 「業界の常識の観点からみた競争戦略」『竹野内情報工学研究所 IT懸賞論文』75-84.

⑨ 小林満男・根来龍之 (1998) 「規制された業界の業界変革モデルの提案」『産能大学紀要』19 (1), 79-118.

⑩ 栗原功幸・小林満男・伊藤清敏 (1982) 「4/5/6L-D1方式現場試験結果」『電気通信研究所研究実用化報告』31 (7), 1333-1348.

所属学会

その他

日本経営学会、組織学会、経営戦略学会、経営情報学会、情報システム学会
電子情報通信学会、日本技術士会

技術士 (電気電子)、中小企業診断士 (1991年登録、現在休止中)
情報処理技術者 (特種)

無線従事者 (第1級総合無線通信士・第1級陸上無線技術士)

電気主任技術者 (第2種)、電気通信主任技術者 (伝送交換・線路)

長野大学企業情報学部 非常勤講師 (2008)

立教大学経営学部 兼任講師 (2010)

東京理科大学理窓技術士会 運営委員 (2008 ~)

新潟市水道事業経営審議会 委員 (副会長) (2011.10 ~ 2017.9)

一般財団法人自治体衛星通信機構 理事 (2012.4 ~)

経営情報学会理事 (2005 ~ 2006、2013 ~ 2016)

経営情報学会 2014年秋季全国大会大会委員長

情報システム学会理事 (2017 ~)

新潟市西川図書館協議会 委員 (2013 ~ 2016) 会長 (2017 ~ 2018)

新潟市黒崎商工会 経営発達支援事業評価委員会委員 (2017 ~ 2021)

日本経営学会 第92回大会 (2018) 大会委員長

新潟市西区赤塚中学校 学校評議員 (2020 ~)

新潟砂丘遊々会事務局 (2018 ~)



| | |
|------|---|
| 氏名 | チカヤマ エイスケ 近山 英輔 CHIKAYAMA Eisuke |
| 職名 | 教授 (2017年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : chikaya@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 1993年3月 長岡工業高等専門学校土木工学科卒業 1995年3月 長岡技術科学大学工学部生物機能工学課程卒業 1997年3月 長岡技術科学大学大学院工学研究科生物機能工学専攻修士課程修了 |
| 学位 | 博士 (工学、長岡技術科学大学、2010年6月) |
| 学歴 | 2000年5月～ 2005年4月 (特) 理化学研究所ゲノム科学総合研究センターテクニカルスタッフ 2004年2月～ 2004年3月 東京農工大学工学部非常勤講師を兼任 2005年5月～ 2011年8月 (独) 理化学研究所植物科学研究センター技師 2010年7月～ 2011年8月 横浜市立大学大学院生命ナノシステム科学研究科大学院客員研究員を兼任 2011年1月～ 2011年8月 (独) 理化学研究所次世代計算機科学研究開発プログラムを兼任 2011年9月～ 2017年3月 新潟国際情報大学准教授 2019年9月～ 2020年8月 ヨハネス・ケプラー大学 (オーストリア) 客員教授 |
| 研究分野 | (1) 生物物理学、生物情報科学 (2) 磁気共鳴 (3) 高性能計算 |
| 主要業績 | ① Yamada, S., Chikayama, E., & Kikuchi, J. (2021). Signal deconvolution and generative topographic mapping regression for solid-state NMR of multi-component materials. <i>International journal of molecular sciences</i> , 22 (3), 1086. ② Yamada, S., Ito, K., Kurotani, A., Yamada, Y., Chikayama, E., & Kikuchi, J. (2019). InterSpin: integrated supportive webtools for low- and high-field NMR analyses toward molecular complexity", <i>ACS Omega</i> 4, 3361-3369 ③ Ito, K., Obuchi, Y., Chikayama, E., Date, Y., & Kikuchi, J. (2018). Exploratory machinelearned theoretical chemical shifts can closely predict metabolic mixture signals, <i>Chemical Science</i> 9, 8213-8220. ④ Chikayama, E., et al., (2017). Transcendental Number in Wonderland, <i>Math Horizons</i> 24, 22. |
| 所属学会 | 日本生物物理学会、日本核磁気共鳴学会、日本磁気共鳴医学会、バイオスーパーコンピューティング研究会 |
| その他 | 2011年9月～ 理化学研究所客員研究員 |



| | |
|-------------|---|
| 氏名 | カワハラ カズヨシ 河原 和好 KAWAHARA Kazuyoshi |
| 職名 | 准教授 (2019年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : kawahara@nuis.ac.jp |
| 学籍 | 1993年 信州大学工学部情報工学科卒業 1995年 信州大学大学院工学系研究科博士前期課程情報工学専攻修了 1998年 信州大学大学院工学系研究科博士後期課程システム開発工学専攻修了 |
| 学位 | 博士 (工学) (信州大学、1998年3月) |
| 学歴 | 1998年4月～ 1999年3月 岐阜大学バーチャルシステム・ラボラトリー非常勤研究員 |
| 研究分野 | 画像処理・画像認識・コンピュータビジョンとその応用に関する研究 |
| 主要業績 | 論文 ① Haruhiro Fujita, Masatoshi Itagaki, Kenta Ichikawa, Yew Kwang Hoo, Kazuyoshi Kawahara, Aliza Sarlan (2020). Fine-tuned Surface Object Detection Applying Pre-trained Mask R-CNN Models, <i>IEEE Conference Proceedings of 2020 International Conference on Computational Intelligence (ICCI)</i> , 17-22. ② 河原和好 (2019). 「IoT による地盤沈下の観測」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 2, 1-12. ③ 近藤進・河原和好・上村喜一・中野又右衛門・小林満男 (2019) 「無人航空機 (ドローン) による水田と白鳥の観察」『新潟国際情報大学経営情報学部紀要』 2, 21-28. ④ 河原和好 (2017). 「小学生を対象にしたプログラミング教育について」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 3, 27-35. ⑤ 河原和好 (2016). 「福祉・介護・健康に関する画像処理の研究—視覚のシミュレーション—」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 2, 14-22. ⑥ 河原和好 (2005). 「ファジィ理論を用いた画像の特徴抽出」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』 8, 169-178 ⑦ K.Kawahara, K.Nakashima, H.Fujita, T.Hara, T.Endo, T.Iwase (1999). Edge Analysis of Digital Mammogram, <i>Proceedings of 2nd MAGNETO-ELECTRONICS International Symposium</i> , 339-342. ⑧ K.Kawahara, T.Miyazaki, Y.Shidama, H.Yamaura, H.Miyao (1997). Fuzzy Image Processing with Topological Theory, <i>Proceedings of IEEE TENCON'97 (IEEE Region 10 Annual Conference)</i> , 1, 333-334. ⑨ 河原和好・師玉康成・宮崎敬・中村八束・山浦弘夫 (1997). 「ファジィ集合論を用いた画像処理」『電子情報通信学会論文誌D』 80 (1), 166-174. |
| 所属学会 その他 | 電子情報通信学会、情報処理学会 電子情報通信学会信越支部運営委員 (2020～) 信越情報通信懇談会連絡担当 (2020～) WRO Japan 新潟地区実行委員 (2019～) 特定非営利活動法人にいがたデジタルコンテンツ推進協議会幹事 (2017～) |



氏名
職名
連絡方法
学歴
学位
職歴

ナカダ トヨヒサ

中田 豊久 NAKADA Toyohisa

准教授 (2021年4月)

E-mail : nakada@nuis.ac.jp

1993年 東京工科大学機械制御工学科卒業

2006年 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士後期課程修了

博士 (知識科学) (北陸先端科学技術大学院大学、2006年3月)

1993年 NECロボットエンジニアリング株式会社

1996年 株式会社日本総研テクノス

1997年 株式会社ソリトンシステムズ

2003年 株式会社本田技術研究所

2006年 北陸先端科学技術大学院大学 産学官連携研究員

研究分野
主要業績

ゲームおよび人工知能の応用に関する研究

論文

- ① Toyohisa Nakada (2017). Gamified Lecture Courses Improve Student Evaluations but Not Exam Scores. *Frontiers in ICT*.4,5. doi:10.3389/fict.2017.00005.2017.04.12.
- ② Toyohisa Nakada (2010). Destination Board System Based on Photographs. *Proc. of Knowledge-Based and Intelligent Information and Engineering Systems (KES2010)*, LNAI 6279, 449-456.
- ③ 中田豊久 (2009).「画像による行き先掲示板システム」グループウェアとネットワークサービス・ワークショップ2009, 75-80.
- ④ 中田豊久・加藤義彦・國藤進 (2009).「友人ネットワークの状態遷移図による分析」『情報処理学会論文誌』2 (1), 87-97.
- ⑤ 中田豊久・金井秀明・國藤進 (2007).「スポットライトを用いた屋内での探し物発見支援システム」『情報処理学会論文誌』48 (12), 3962-3976.
- ⑥ Toyohisa Nakada, Yoshihiko Kato, and Susumu Kunifuji (2007). A Study on the Dynamics of Friendship Network Formation Using a Directed Network Model, *The 2nd International Conference on Knowledge, Information and Creativity Support Systems*, 72-79.
- ⑦ 中田豊久、伊藤日出男、國藤進 (2007).「ベイジアンネットワークを用いた画像解析による同期信号の判別」『日本知能情報ファジィ学会論文誌』19 (5), 488-498.
- ⑧ Toyohisa Nakada, Hideaki Kanai, and Susumu Kunifuji (2007). Dynamic Book Recommendation Model for Real Bookstores, In *Adjunct Proceedings of The 5th International Conference on Pervasive Computing (Pervasive 2007)*, 53-56.
- ⑨ 中田豊久・金井秀明・國藤進 (2007).「実世界での利用を考慮した図書推薦モデルの提案と評価」『情報処理学会論文誌』48 (1), 148-162
- ⑩ 中田豊久・國藤進 (2005).「個人ホームページからのサブグループ発見手法の提案」『日本創造学会論文誌』9, 42-59.

所属学会

情報処理学会、人工知能学会、日本デジタルゲーム学会



| | |
|------|---|
| 氏名 | ミヤキタ カズユキ 宮北 和之 MIYAKITA Kazuyuki |
| 職名 | 講師 (2020年4月) |
| 連絡方法 | E-mail : miyakita@nuis.ac.jp |
| 学歴 | 2003年 3月 長岡工業高等専門学校電気工学科卒業 2005年 3月 長岡工業高等専門学校専攻科電子機械システム工学専攻修了 2007年 3月 新潟大学大学院自然科学研究科数理・情報電子工学専攻博士前期課程修了 2010年 3月 新潟大学大学院自然科学研究科情報理工学専攻博士後期課程修了 |
| 学位 | 博士 (工学)、新潟大学、2010年3月 |
| 学歴 | 2010年 4月～2012年3月 新潟大学大学院自然科学研究科電気情報工学専攻 助教 2012年 4月～2020年3月 新潟大学情報基盤センター 助教 |
| 受賞歴 | 2008年 9月 IEEE Shin-etsu Section Young Researcher Paper Award 受賞 2009年 3月 電子情報通信学会回路とシステム研究会優秀学生発表賞 受賞 2009年10月 IEEE Shin-etsu Section Young Researcher Paper Award 受賞 2010年 3月 電子情報通信学会学術奨励賞 受賞 2018年 3月 電子情報通信学会安全・安心な生活とICT研究会優秀研究賞 受賞 2019年 9月 電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ貢献賞 受賞 |
| 研究分野 | ネットワーク工学、ネットワーク理論 |
| 主要業績 | 論文 ① 柄沢直之・宮北和之・田村裕・中野敬介 (2022). 「歩行者自身が障害物になる状況を考慮した情報フローティングの理論解析」『日本シミュレーション学会論文誌』14 (1), 9-19. ② Karasawa, N., Miyakita, K., Inagawa, Y., Kobayashi, K., Tamura, H., & Nakano, K. (2020). Information Floating for Sensor Networking to Provide Available Routes in Disaster Situations. <i>IEICE Transactions on Communications</i> , E103-B (4), 321-334. ③ 宮北和之・柄沢直之・稲川優斗・中野敬介 (2018). 「情報フローティングによる交通誘導に関する考察」『電子情報通信学会論文誌B』J101-B (8), 603-618. ④ Nakano, K., & Miyakita, K. (2016). Analysis of information floating with a fixed source of information considering behavior changes of mobile nodes. <i>IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences</i> , E99-A (8), 1529-1538. ⑤ Kim, Y-P., Nakano, K., Miyakita, K., Sengoku, M., & Park, Y-J. (2012). A Routing Protocol for Considering the Time Variant Mobility Model in Delay Tolerant Network. <i>IEICE Transactions on Information and Systems</i> , E95-D (2), 451-461. ⑥ Miyakita, K., Nakano, K., Sengoku, M., & Shinoda, S. (2009). Characterization of Minimum Route MTM in One-dimensional Multi-hop Wireless Networks. <i>IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences</i> , E92-A (9), 2227-2235. ⑦ Miyakita, K., Nakano, K., Morioka, Y., Sengoku, M. & Shinoda, S. (2009). Characterization of Minimum Route ETX in Multi-hop Wireless Networks. <i>IEICE Transactions on Communications</i> , E92-B (3), 745-754. |
| 所属学会 | 電子情報通信学会、IEEE |
| その他 | 電子情報通信学会回路とシステム研究専門委員会 幹事補佐 (2011年6月～2013年5月) 電子情報通信学会回路とシステム研究専門委員会 専門委員 (2013年6月～2015年5月) 電子情報通信学会 Fundamentals Review 編集委員 (2013年6月～2015年5月) 電子情報通信学会安全・安心な生活とICT研究専門委員会 幹事補佐 (2017年6月～2018年5月) 電子情報通信学会安全・安心な生活とICT研究専門委員会 幹事 (2018年6月～2019年5月) 日本シミュレーション学会和文論文誌 編集委員 (2019年4月～) 電子情報通信学会安全・安心な生活とICT研究専門委員会 専門委員 (2019年6月～) |

新潟国際情報大学研究者総覧 2022

2022年4月 発行

編集：新潟国際情報大学 総務課

発行：新潟国際情報大学

新潟市西区みずき野3丁目1番1号 〒950-2292

TEL.025-239-3111

FAX.025-239-3690



新潟国際情報大学

Niigata University of International and Information Studies

950-2292 新潟市西区みずき野3丁目1番1号

TEL.025-239-3111 FAX.025-239-3690

✉ somu@nuis.ac.jp <https://www.nuis.ac.jp/>

